

水の文化

京都の

謎



米山俊直「盆地都市と水の文化」
カッパ研究会「カッパが語る京の水」
白幡洋三郎「庭園は総合生活空間」
樋口忠彦「何を見る」というよりは「どこから見る」
浜野 潔「水と町衆が生み出す暮らしの勢い」
編集部「第3回世界水フォーラム報告」
水の文化楽習実践取材「新聞発行から学ぶこころ言葉」
編集部「盆地都市を想像する」
松井 恵「夏の京都 水風景」
古賀邦雄 水の文化書誌「京都の水」

盆地都市と水の文化



米山俊直 よねやまとしなお

大手前大学学長、京都大学名誉教授、
淀川水系流域委員会猪名川部会長
1930年生まれ。文化人類学、アフリカ地域研究、都市人類学、比較文明論専攻。著書に『小盆地宇宙と日本文化』（岩波書店）、『アフリカ農耕民の世界観』（弘文堂）、『都市と祭りの人類学』（河出書房新社）、『私の比較文明論』（世界思想社）等。

京都は、冬は底冷えが厳しく、夏は蒸し暑い、と文学者たちが書いている。それは他所から京見物に訪れる人々の共通の感覚で、江戸時代の滝沢馬琴あたりまでさかのぼることができる。

これは、盆地の典型的な気象である。たしかに京都は山城盆地あるいは京都盆地と呼ばれる盆地であって、平安京は盆地に生まれ、以来、千二百年の都市として現在にいたる。

盆地という言葉は英語でいうとBASINである。それは同時に流域という意味を持っていることに注意しておいてよいだろう。盆地は流域でもある。

京都は、鴨川と桂川の二つの川が集まる盆地である。鴨川は、北山を水源とする賀茂川と高野川という川が御所の東で一つになつて南に流れる。また桂川は、西の亀岡盆地から流れてくる大堰川が、保津峡をこえて保津川と呼ばれ、さらに桂川となつて市の南で鴨川と合流する。さらに、明治時代に建設された琵琶湖疏水によって琵琶湖から水が引かれて、市民生活を支えている。流れはすべて淀川に注ぐ。淀川はさらに木津川とも合流して、やがて大阪湾にいたる。

考えてみると、京野菜、すなわち、加茂すきぎ、壬生菜、聖護院大根・蕪、加茂茄子、鹿ヶ谷南瓜、堀川牛蒡、桂瓜、七条芹、九条葱など、産地は多少遠くなったが、そのブランド名は残っている。伏見の清酒は摂津の灘とならぶ日本酒の代表的産地。宇治茶もブランドとして定着している。そして豆腐や湯葉、あるいは麩といった和食のもとにある食材の多くが、水の恩恵を受けている。京都の年中行事のなかの食文化にも、これらの自然が反映している。そしてこの水が、茶道、華道の家元を生み、鴨川の河原が阿国歌舞伎をはじめとする芸能を生み出してきた。

友禅染めの工程にも、染め上げた布から糊を川で流し落とす作業があつて、かつては鴨川の風物詩であつた。伝統産業である西陣織や京焼（清水焼）にもこの豊かな水が直接間接にかかわっているし、先端産業の繊細なハイテクも、この風土と無関係ではない。

嵯峨の角倉了以・素庵が開いた高瀬川が、市内の水運を高度化し、川は交通路としても京都の人々に恩恵を与えてきた。疏水も用水の道に加わり、一時は水運を支えた。

京都の人々にとつて、その水源は神の住まいであつた。奥宮には石座があつて、古代の祭祀の跡をうかがわせる。貴船神社のご祭神は、オカミと呼ばれる水の神で、日本書紀にイザナギノミコトが火の神カグツチを斬つたときに生まれた神とされている。オカミとは水の湧き出る所の意味で、閻オカミと高オカミという別もある。前者は地下水のこと、後者は高い水源を指している。平安時代には、日照りのときは黒馬、大雨の時は白馬が赤馬を、朝廷が奉納して祈願された。鎌倉時代からそれが「絵馬」になつたという。今でも毎年三月九日には、雨乞祭が営まれる。

もう一つの源流は、雲ヶ畑の岩屋山志明院である。弘法大師の建立とされ、修験道の行場であつたようである。歌舞伎十八番「鳴神」の舞台でもある。鳴神上人が雨を封じ込めて民衆が日照りで困っているのを、雲の絶間姫が色じかけでその法力を解くという物語。急な崖に洞窟があつて、修業の場を思わせる。

周囲の山々を集水域とする盆地には、その底に弥生時代以来の広い水田を持つ。そしてその周りの「中山間地域」には、谷を

のぼる棚田や新炭林とともに、茶畑やみかん園などの果樹園、桑畑などがある。さらにその周りには、いわば縄文時代の名残を留めた深山があつて、野獣と修験道の世界になる。周囲の山々から集まつた水は、一方に流れ出て、これが日本列島に一〇〇を数える小盆地宇宙であつた。それをつなぐのは、盆地底の城と城下町であつた。外来の人、物、情報はそのネットワークでつながり、それぞれの選択があつて、それぞれの個性ある地域社会を形成してきた。

今、盆地底の城下町が都市化によって拡大して、各地に盆地都市が誕生しているが、その原形は平安京からの都、発信源である京都に求めることができるだろう。それを千年にわたつて持続させたものは、周囲の山々から流れ出る豊かな水だつたといえよう。

白河法皇をして、ままならぬもの一つに数えられた鴨川の水も、治水によって今は穏やかに流れている。そして盆地の王都も、千年の歴史を継承して現代を迎えている。



京都はなぜ1200年も続いてきたのか。

この謎に対する答えとして、

「盆地の都市だから」

と言ってしまうのは、

少し無謀に見えるかもしれませんが。

しかし、京都を盆地に育まれた計画都市として眺めると、

郊外に拡大していく平野のメガロポリスにはない空間感覚が

あるよつに感じられます。

それは水が巡ることを実感できる規模、

私たちの身の丈に合った都市のイメージを

与えてくれるからなのかもしれません。

京都は初めに計画ありきの都市でした。

地下には琵琶湖にも匹敵する

巨大な地下水盆がある、

そんなエピソードもまた、

京都の都市としての資質を

後押しするものに思えてきます。

盆地をつまぐ活用してきた都市・京都は、

1200年後の現代もなお、

持続可能な社会に求められる

可能性を示唆してくれるのです。

水の文化 14号 2003年8月

特集「京都の謎」

盆地都市と水の文化 米山俊直 2

カップが語る「京の水」カップ研究会 4

盆地京都を庭園都市と見立てる
庭園は総合生活空間 白幡洋三郎 10

領域感覚からの発見は何を生み出すのだろうか

「何を見る」というよりは「どこから見る」 樋口忠彦 14

歴史人口学から見た京都

水と町衆が生み出す暮らしの勢い 浜野潔 19

第3回世界水フォーラム報告 編集部 24

水の文化 楽習実践取材

第3回世界水フォーラム取材する「水つ子新聞」
新聞発行から学ぶこころ言葉 編集部 28

盆地都市を想像する 編集部 34

くらしのまなざし 夏の京都水風景 松井恵 38

水の文化書誌 京都の水 古賀邦雄 40

インフォメーション 42



カツパが語る「京の水」



『もっと知りたい水の都京都』
(人文書院、2003年) 鈴木康久・大滝裕一・平野圭祐編

『もっと知りたい！水の都 京都』を著したカツパ研究会の方々に集まってもらい、外からはなかなかうかがい知れない「京都」の水はなしをうかがいました。

まずカツパ研究会について教えてください。

鈴木 第3回世界水フォーラム開催を契機として2001年9月に活動開始しました。カツパ研究会といっても、カツパを研究するのではなく、京都の水について調べようという会で、仲間はざっと20数名です。

大滝 私の場合は、仕事で河川行政に十数年関わっていますが、いつのまにか川が好きになってしまいました。いろいろある川がありますが、一つとして同じ川はありません。そのような川や水の世界に惹かれ、鈴木さんの話にころっと

乗ってしまいました。

平野 私はその年の12月に貴船神社で開かれたカツパの座談会を仕事で取材に行ったのです。「水源の神を考える」というテーマで講師は貴船神社宮司の高井和さんでした。もともと私は水に関心が強かったものですから、そこで意気投合して入りました。入ると言っても、会則も会員証もないのですが。

貴船神社 賀茂川上流、貴船川の渓谷に鎮座している。水の神である「高おかみ神」を祀る。古代より水の神、早魃を祈る神として信仰され、同じ性格をもつ大和の国の丹生川上神社(奈良県吉野郡)とともに、「丹貴二社」と呼ばれた。

星野 私はラジオで川をめぐる番組を持っていて、近畿の川でいろいろな活動をしている方から話そうかがっていました。「世界水フォーラム市民ネットワーク」が設立されたときに、仕事の興味も手

伝って参加しました。この中にカツパ研究会の名前を見つけ、いい名前だなと思い活動内容を見ると「水と文化」について調べている。これは面白いと思い、入会させていただきました。

鈴木 「世界水フォーラム市民ネットワーク」というのは、京都の水関係活動団体のネットです。ODAやダムのは非をテーマにした団体、雨水利用を進めるなど、いろいろな人が入っていました。京都の水に関わっているグループはほとんど入っていたと思います。カツパの会もその一つとして参加していました。

京都の水文化は暮らしと直結している

星野 私は5年前に、結婚で東京からこちらに来たのですが、私のような元東京人にとって、京都の

寺社が素晴らしいのは当たり前で、それは何度訪れても変わりません。ただそれ以上に、京都の暮らしに触れると観光名所に行かなくても、普通の人に教わるのがたくさんあるんですね。

以前、名水めぐりをしたときに名水と呼ばれる井戸水をもつ松尾大社や梨木神社など、何人かの宮司さんにお話をうかがったことがあります。名水といつどこも同じような気がするものですが、一人一人の宮司さんに向かおうと違つ。自分の水を守りたいという気持ちも強いですし、本当に大切にしておられる。自分達の生活につながっているもので、けつして観光のためにあるものではない。それは、観光客にはなかなか伝わらない話です。

松尾大社 酒の神を祀っており名水「亀の井」がある。酒造りにこの水を加えると失敗しないといわれ、秋に行われる酒造祈願祭に集まる全国各地の酒造業者がこの水を持ち帰るといふ。

みなさんが集まったのは京の造り酒屋の歴史を伝える「堀野記念館」の一室。町家の奥には名水「桃の井」(写真左下)がある。

鈴木康久

すずき やすひさ

京都府農林水産部農村振興課
カツパ研究会事務局 京都府生まれ
著書に『これからのグリーン・ツーリズム』(分担執筆、家の光協会)がある。(写真右より2人目)

大滝裕一

おおたき ゆういち

京都府土木建築部河川課
京都府生まれ。1990年以降、河川行政を担当。カツパ研究会の他、全国河川開発調査会会員、NPO由良川流域ネットワーク会員、川の日ワークショップ実行委員。(写真左より2人目)

平野圭祐

ひらのけいすけ

毎日新聞社京都支局兼経済部

京都市生まれ。横浜支局をへて京都支局記者。現在は宗教、花街を担当。町家で暮らしながら、京都をテーマに取材や講演活動をしている。著書に『京都水ものがたり』（淡交社）がある。（写真左端）

星野祐美子

ほしのゆみこ

フリーアナウンサー

神奈川県生まれ。静岡放送アナウンサーを経て関西でフリーとなる。ラジオ大阪で川のレポートを担当し、世界水フォーラムに公私ともに関わっている。（写真右端）



水が生活に密接に関わっていると感じられたということですね。具体的にどのようなことなのでしょうか。

平野 例えば、町家の打ち水があります。間口が狭く真ん中に坪庭を撒くと温度差が生じて空気が動き、風が起きます。私の家は表と裏の両側に道に面しているの通りですが、水を撒くことで一層涼しい風が入ってきます。夏でもほとんどクーラーは使いません。水の力を借りて自然のクーラーのように涼しくさせます。

水を撒くと雰囲気だけでも涼しいです。これも知恵ですね。今は電気ポンプで汲み上げていますが、井戸もあります。井戸水は食生活ともかかわりが強いですが、父親が染め物職人だったので、仕事にも直結していました。すべて地下水のおかげで暮らせているというのが、昔からの実感です。

ただ私にとってはそれが当たり前で、あまり有り難みも感じていませんでした。しかし、就職した初任地が横浜で、離れてみて初めて京都の水の有り難みがわかりました。

「水の知恵が重層的に織りな

されてきた文化を育んできたのが京都」と書かれています。なせ京都では水の文化が育てられてきたのでしょうか。

鈴木 町衆の存在は大きいでしょう。江戸時代の町の地図を見ますと、区画ごとに門があり、夜は入れないようになっています。その中では、家の戸を開けていても大丈夫。道路も狭かったので安心して暮らすことができたはず。そうした町衆の密接な関係が、水に関する文化も育んできたのだと思います。

町衆 応仁の乱以降、商工業者・手工業者が中心に地域的団結組織として町ができ、そこに住む人々を町衆と呼びなりました。町は道路を挟んで形成された近隣組織。この町が集まって結成された自治組織が町組となる。室町期には上京、下京ともに各5つであった町組も、17世紀には上京12組、下京8組に増えた。この他にも、御所西側に位置しながら上京町組に属さない禁裏六丁町、下京の町組に属さない東本願寺・西本願寺の両寺内町組がある。町組の運営は、10名の総代が担当した。総代には経済力をもつ酒屋や土倉などの有力町衆が就任した。ちなみに土倉とは現在でいう金融業者・財産管理業者で、京都の場合は山門（延暦寺）や祇園社などの有力寺社を顧客にしていたという。

大滝 江戸時代には鴨川に土砂が溜まり、困っていました。本来なら役所で処理するところですが、役所に頼っても仕方がないということで、町衆ごとに隊を作り、土砂の浚渫（しゅんせつ）をしています。みんなが



砂を持ち、何万人も総出で、お祭りのようになつて土砂浚渫を行っている絵が残っています。それを見ると、旗を振つて、みんな楽しそうです。やはり、町の人は役所には頼らないという面が強かったのではないのでしょうか。

平野 京都では小学校も町の人で作っていますし、そういう町衆のエネルギーは強かったと思います。特徴的なのは地蔵盆で、町内では大人も子供も集まります。町衆の力は昔ほどではないにせよ、いまだに残っています。

京都の小学校 1869年（明治2）、それまでの町組が解体、再編され、上京33、下京32の新しい町組が成立し、行政基盤となった。これが町組改正で、このときになってきた町組が現在の小学校学区の元型となっている。京都府はこの新しい各町組ごとに、町組合所兼小学校を建設した。これを一般に番組小学校と呼ぶ。小学校は単に教育機関であるだけでなく、町会

所であり、府の出先機関でもあり、警察、交番や防火楼を設置した。さらに、塵芥処理、保健所の仕事も担った。これらの経費一切は町組が負担した。このように、学区が独自の財源をもつ仕組みは、1941年（昭和16）の国民学校令で廃止されるまで続いた。

地蔵盆 京都を中心とする近畿地方で8月24、25日に子供によって行われている。地蔵をまつる行事。

鈴木 そういふ意味では川に関する地域団体も多いですよ。京都市内には30以上あると思います。川ごとに団体が1つあるようなものです。

暴れ川、鴨川

大滝 昔から鴨川は暴れ川で、824年（天長元年）には防鴨河使（ぼうやがし）という鴨川治水の役職が設置されています。白河法皇が洪水を起す鴨川のことを嘆いた話は有名で

すね。昔は護岸がなかったため、川幅は広く、常に為政者は川に氣を使っていました。

ちなみに、2000年の東海豪雨と同じ雨が鴨川で降るとどうなるか。シミュレーションした図面を見ますと、鴨川西側の二条城や桂川との合流点の辺りまで水に浸かることがわかります。こうした災害時の危機管理を、役所だけではなく地域住民とあらかじめ話し合っておく必要性を感じます。

鴨川 京都の市街地を南北に貫流し、「賀茂川」「加茂川」とも書く。過去、しばしば洪水をおこし、院政をはじめた白河法皇さえ、「賀茂河の水・双六の賽・山法師」をぞわが心にかねぬもの（平家物語）と天下不如意の第1に鴨川を挙げた。

鈴木 豊臣秀吉が寺を集めて寺町を作ったのは、鴨川から町を守る目的であったという説もあります。

大滝 江戸時代の鴨川は幅が広く、少なくとも現在の高瀬川は鴨川の一部でした。河原町通があります。河原町は文字通り河原。河原町通と高瀬川の間には岬神社がありますが、そこは岬のような地形ということ、その附近は河原だったのだでしょう。おそらく現在は江戸時代に比べ川幅は半分程の狭さになっていると思います。先斗町も全部埋め立てできた町です。

平野 今は、川幅は狭く、その代

わり、川底は倍くらい深くして、できるだけ早く流してしまおうという考え方になっていきます。地下に伏流水が流れていて、表面は水がちよるちよるとしか流れていなかったことが古地図を見るとわかります。

鈴木 江戸時代に「井戸で使った水を川に流すように」というお触れが出ています。川の水量が減ったためか、川のゴミを流すためかもしれません。

大滝 特に出町柳から上流の賀茂川は、明治時代の地図を見ても水の流れは見られないですね。ということは、ほとんど伏流水だったということ。1935年（昭和10）に大洪水が起こったときに川底を倍近い深さにしたので、常に水が流れるようになりました。



平野 川床で食事をして涼をとり暮らしを楽しむという、京都独特の床の文化があります。これは、室町時代あたりから始まっている

のですが、最初は鴨川の中洲に床しじょうの床を置いていました。江戸時代前期（1670年）になると高床式の川床が現れ、床几形式と併存します。明治27年に鴨川の東側を流れる琵琶湖疏水、「鴨川運河」の完成とともに、当時東側にもあった高床の川床は姿を消します。

大正時代に鴨川の河川改修が行われ、中洲を取り除かれて流れが速くなつたため、床几形式の床は禁止になりました。同時に、鴨川右岸に高水敷こうみずしき（河川と堤防の間にある平らな部分）を造る計画が持ち上がる。飲食店が床の出店ができなくなるから困ると京都府に陳情

その結果、高水敷に人工水路の「みそそぎ川」が開削され、その上に床が出され、現在の形態になりました。現在では、その「みそそぎ川」が納涼床の底に流れています。鴨川そのものが「みそそぎ」をする川で、天皇が禊ぎをする場所が7カ所ありました。想像ですが、たぶんそこから名前をとつてみそそぎ川としたのでしょう。人工水路のみそそぎ川も、元は鴨川と言っていたのです。

床 川床のこと、京都では「ゆか」と呼ぶ。

大滝 鴨川を含め京都を流れる川は、地形上南北に傾斜がありますから、用水として横に回しやすいという盆地ならではのメリットが

あります。これが平地なら回せないですよ。鴨川はおそらく政令指定都市の川の中で一番勾配が急だと思えます。平均して、400m行つて、1m下がるくらいです。からね。東寺の塔と北山通の高さが同じくらいですから、相当な勾配です。他の都市は河口に立地して

いますから、流れはもつと緩いですよ。したがって京都は昔から洪水が厳しい。水は回しやすいが、リスクも高いのです。

平野 自転車で行くと、勾配があることがよくわかりますよ。

誇りたい水の文化

京都人として誇りたい水の文化を挙げていただけませんか。

大滝 やはり風光明媚を表す「山紫水明」という言葉が生まれたのが鴨川であることは誇りたいですね。最初、中国の言葉かと思つたのですが、頼山陽が鴨川を見てつくつた言葉と知り感動しました。

頼山陽（1780-1832年） 江戸時代の漢学者で幕末の志士に影響を与えた歴史書「日本外史」を著す。1822年から10年間、現在の丸太町橋上流に居を構え、書齋を「山紫水明処」と名付けた。現在も当時の居が残されている。

鈴木 私は、貴船神社や神泉苑に代表されるように、水の神様の中

心が京都にあるということ。私は水に関して、京都の特性は3つあると思つています。第1は水の政まつりが行われていたこと。水の神様が京都にいて、日本の水の神様の中心であった。雨乞いも朝廷が京都で行つていた。日照りになつたとき、天皇や貴族の荘園に雨を

もたらさないといけない。その政が天皇の仕事だったわけで、貴船神社や神泉苑は重要な場所だった。第2は、水を中心に考えた都市計画があつたということ。第3には豊かな水が生み出す食文化、お酒、豆腐・・・素晴らしい所です。

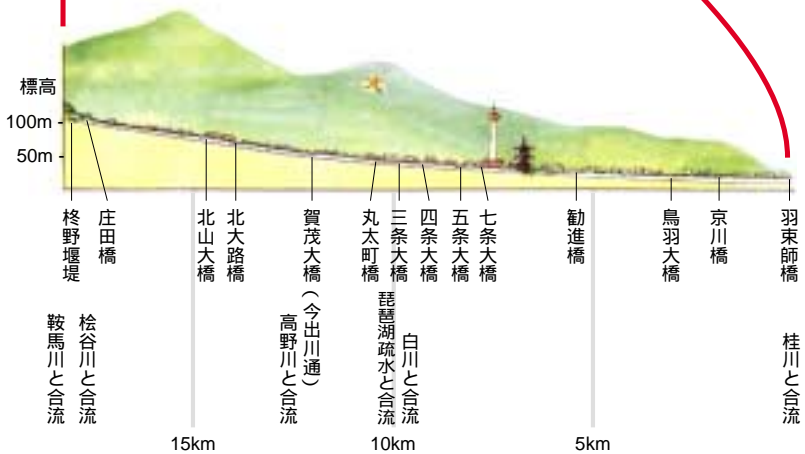
神泉苑 平安京が造られたときに、大内裏の南東に造られた広大な苑池。総面積約13万平米（延暦18）、桓武天皇の行幸を最初に、歴代天皇の行幸の場となり、詩歌管弦、はやぶさを放つて水鳥を捕らえる遊漁、舟遊びなどが行われた。また、雨乞いの場としても用いられた。また、京で初めて公に御霊会（政治的に非業の死を遂げ怨霊となつた霊を鎮める祭）が行われた場所でもある。現在もその一部が二条城の南に残っている。



星野 私は東京から来てまだ5年で、京都人と言つて良いのかどうか。3代住んでようやく京都人と言えると・・・。



鴨川縦断図 京都府「千年の都と鴨川治水」より



平野 大丈夫。構いませんよ。京都に住んでいるという誇りがある方は、皆京都人です。

星野 お豆腐とか、麩とか、お酒とか、京都の食べ物がおいしいと



えたことがなかった。それはやはり、地下水が理由で、しかもまだに続いているということがすごいですと思います。町中にたくさん豆腐屋さんがありますが、「地下水が出なくなったのでやめます」と言っくらい、皆さん地下水を大事にしています。それって、私は東京でスーパのお豆腐しか買っていないので考えてもみなかったことで、カルチャーショックに近いものがありました。水の文化が昔から生活の中にあり、今も守られている。それを、誇りたいですね。いまだに、ラッパ吹いてり

Yorker引いて売りにきますものね。

平野 井戸水は水温が一定ですからね。17度くらいで、夏だと冷たく感じ、冬だと暖かく感じます。

僕も、暑い夏場は水浴びし、冬は顔を洗うのに暖かい井戸水を使う習慣があります。京都に井戸は欠



かせません。

星野 東京にいるときは地下水で作っているということを知らずに京都の水は琵琶湖の水のはずなのに、なんで豆腐や湯葉はおいしいのだらうと思っていました。

平野 一時、京都の水がまずくなつたと言われたことがありますが、それは地下水ではなく水道水のことだったので。しかし、私は基本的に水道水は飲みません。きちんと検査をして飲んで大丈夫なの

ですが、井戸水を一旦沸騰させて飲んでいきます。

鈴木 昔は、瓶に水を一旦溜めて、それを飲んでいました。上賀茂神社の社家のお宅でつかがったのですが、瓶に入れておく冷たいままなので、水は悪くなりにくいということでした。

社家 特定の神社に世襲的に奉仕する神職の家。

ペットボトルの水を買って飲んだことはありませんか？

平野 取材で外国に行ったときなどを除くとありません。水を買って飲むという感覚に抵抗がありません。

カツパの会で編集した『もっと知りたい！水の都 京都』は充実した内容でした。

平野 京都の観光ガイドは多数出版されていますが、それとは角度を変え、「京都を水から見たらどうなるか」という提案を書いてみたのです。

僕は生まれも育ちも京都で、家の近くには鴨川があり、琵琶湖疏



南禅寺の奥、琵琶湖疏水を流す橋脚

水も流れています。家には井戸があり、父親が染め物をしていたという環境に育ったので、井戸水を使うのは当たり前でした。小さいころから川遊びといえは鴨川でしたし、源流を辿ったり、床にも行っていました。子供時代の原風景として鴨川があつたのです。だからどうかはわかりませんが、水を見ると、昔から辿りたくなるんです。習性ですね。好きなんですよ、水が。例えば、今は下水道になつている西洞院川という平安京からの川があり、取材の仕事で訪れた際にその暗渠の下にも潜って写真を撮らせてもらいました。

琵琶湖疏水 都市機能の再生のために明治前期に造られた琵琶湖と京都を結ぶ水路。第一期工事は1885年(明治18)起工、1890年(明治23)に完成した。計画時の目的は第1に水運で、北陸から琵琶湖上を運んだ物資を大津で牛車に積み替えずに運ぶこと。第2は灌漑、第3は動力源確保で、第4は飲料水確保だつた。指揮を執つたのは東大工部部の前身である工部大出たばかりの田辺朔郎(1861-1944)で、日本人だけで行われた。疏水開通により蹴上発電所が設けられ市内の電化が進み、1895年(明治28)には市電が走るようになった。一方、高瀬川曳舟人足の失業や南禅寺付近の掘削工事による井水枯渇などの問題も発生した。

染め物 京都で染め物というと友禅染。江戸時代中期に宮崎友禅により完成された。製作工程は、絹に青花で下絵を描き、でんぶん糊で下絵に沿って細線を置き、乾いたら豆汁(こじり)を生地に引き糊で仕切られた各文様部分に染料を揮す。これを蒸し色を留め、文様部分に糊伏せし、さらにもう一度蒸し、水洗いして余分な染料と糊を取るというもの。これらを各工房で分業していた。使つのは井戸水。温度と、金気(かなけ)つまり鉄分が出来を左右するという。京友禅は、京都の地下水だからこそ生まれたものでもある。

西洞院川 西洞院通に流れていたが1904年(明治37)に暗渠となり、消滅した。もとは鴨川を水源としていたが、室町時代までには一旦消滅。その後、戦国時代から江戸時代初期にかけ、堀川から取水し再び姿を現した。

大滝 そこまでする記者はいません。

平野 そこは合流式下水道なので、汚水と雨水の両方が流れていて大変でした。長靴をはいていましたが、流されたら一巻の終わり。明治時代は下水道を造るのが大変だったので、西洞院川に蓋をして下

水にしたのです。

大滝 客観的なデータはないのですが、確実に川や水の面積は減ってきています。この本の中では今後再び水辺を増やそうという期待もこめて、特に失われた川にも焦点を当てています。

「ゴミを流すのに十分な流速を得るために川を埋めた」とか、失われた理由や元の川の復元図等をきちんと調べています。

平野 大滝さんも私も、もう一度復活させたいという思いは同じですからね。

おいしいから名水というわけではない

名水は文化の多様性が生み出したと書かれています。

鈴木 名水というのを連想しますが、名水をおいしいか、まずいかで論じるのではないと思つています。名水というのは「名のある水」、物語のある水ということ。物語というのはいろいろな「謂われ」のことです。例えば「深草少将の水」は、小野小町に通い続けた貴人が亡くなつた所にある井戸です。室町時代にはお

茶の七名水もありますし、江戸時代に入ると、「京羽二重」という観光ガイドブックに約20の名水が載っています。また、刀鍛冶に使われた吉水という名水もあります。京都に名水が多いというのは、いろいろな水の「使われ方」が存在し、「謂われ」がたくさんあるということの証しです。時代、時代に依りて、物語があり、それが名水を生み出しています。

平野 「柳の水」というのがありますが、これは千利休が使っていました。井戸に直射日光が当たると水によくなくないので、近くに柳を植えた。それで「柳の井戸」と名がついたそうです。

鈴木 宗教的なものもありますね。例えば「独鈷水」。弘法大師が独鈷で地面を打つたら、湧き水が出てきたとか。伏見にある「御香水」は有名で、名水百選にも入っています。かぐわしい香りの水が湧き、それを飲むと病気が治ると言われてきました。

独鈷 密教で使う棒状の法具

大滝 醍醐味という言葉の元になつている醍醐の水、あれも香り系ですね。

鈴木 京の町中で遺跡を発掘する

と、3〜4 m程度の深さに、平安時代から江戸時代までの井戸がいっぱい出てきます。それらの井戸水は基本的には皆同じ味だと思えます。その中である水は名水と言われ、ある水では言われない。物語というのは、そういうものです。

大滝 NHKスペシャルの『アジア古都物語京都 千年の水脈』で、琵琶湖と同じくらいの地下水盆が京都の下にあるという話が、大変有名になりましたが、実は同じ地下水でも浅いところは縦に流れていたりいろいろです。名水の流れとしては、「梅の井」系の流れと、「染の井」系の流れと、「千本通」の流れの3系統があると言われています。このルートの上では、今でも浅いところ水が出る井戸が残っています。

平野 御池通りの南側の井戸を飲み比べてみたことがあったんですけど、深さによって味が違います。

鈴木 浅いと硬度が低く、味柔らかい。京都はだいたい30万人の人口を維持してきた町だと言われています。京都はその30万人が、高いものを天皇や公家に対して供給してきました。町の名前も駄屋町、竹屋町、指物町など、ほとんど商工業や工芸に関する名前です。

そのような技術を競い合ってきた結果、例えば京都のお酒なら硬度が低い水がいいとか、染め物なら鉄分が少ないほうがいいとか、利用する用途に応じた求められる水が多様であったため、おいしい水と呼ばれる伝統ができてきたのだのではないのでしょうか。食材に関しても最高のものにこだわっていったことが、文化を育んできたと思うのです。

疏水と運河

大滝 人口が爆発的に増えたのは、琵琶湖疏水ができてからですか。

平野 人口増加については、疏水の影響が大きかったのではないかな。琵琶湖疏水ができた結果、産業活動も活発となり、人口が増加したのです。

鈴木 江戸末期、確かに地下水が汚染されており、誰もが飲める状況ではなかったの、琵琶湖疏水がなかったら現在の京都はできていなかったというのは間違いない。京都の近代化の礎を、疏水が築いたと言っても過言ではありません。

平野 水道水を供給しているのが琵琶湖疏水ですからね。現在、安定的に供給している水源で京都市

として考えているのは琵琶湖疏水だけです。東京ができて京都が沈滞したというので、琵琶湖疏水の水を使って日本で初めての発電所を造り京都の活気を取り戻したということ、明治時代のプロジェクトは意味があります。今でも京都では湯水はありませんから、もちろん水道供給の意義も大きいですね。第1疏水、第2疏水は明治にできて上がっています。第2疏水は主に水道用で、余計な物が入らないように、ほとんどトンネルになっています。

平野 西陣織が機械化するなど、発電で当時の暮らしも変わりました。

大滝 水フォーラムで映していた田辺朔郎の疏水物語の映画によれば、あの水を南禅寺付近から引っぱり、水車をたくさん回し、産業団地を造るという構想もあったようです。

平野 もとは灌漑に使うということだったようですが、他にもいろいろアイデアがあったみたいですね。また南禅寺の庭は、庭師の小川治兵衛がすべて疏水の水を使って造っています。疏水がなければ、今の南禅寺界隈の風景もないわけです。今は流れていませんが、

もともと御所に水を供給していた御所水道も琵琶湖の水でし、東本願寺の水も疏水の水が地下をくぐってきていますから、京の町に琵琶湖疏水は欠かせません。

大滝 京都では、時代ごとに常に新しい運河が掘られ続けてきます。平安時代は縦（南北）にたくさん掘りました。江戸時代は横（東西）に西高瀬川とか、縦に高瀬川とか、そして明治時代には疏水。その時代、時代の目的で、掘りまくっている。

掘りまくりながら、埋めまくってもいるわけですね。

大滝 ええ。逆に言えば時代背景に合わせて、うまく適応しているといっているのでしょうか。時代ごとに新しい方法で水の利用法を生み出しているということ、すごいことだと思います。

鈴木 各時代に、水をうまく活用する試みがなされているのは、水の恩恵をよく理解していた人たちが住んでいた都市だからだと思います。

大滝 角倉了以も、最初は鴨川を運河として利用するため掘りましたが、すぐ埋まってしまい失敗し

ています。「失敗したな」と思うと、今度は鴨川の一部を利用して、高瀬川を造りました。

鈴木 きつと高瀬川のような運河を造れば、その利用価値が高いということを知っていたのでしょうか。琵琶湖疏水も同様です。

平野 今まで過去の歴史を振り返る機会がなかったと思うのですが、私たちのこうした活動が、みんなの考えるきっかけになればいいかなと思っています。「堀川について知りたいんですが」という電話もかかってきます。「そんなに歴史があるなら調べてみようか」と意識が呼び起こされるようです。

大滝 そうして、愛着を持つ人が増えてきたら、自然と川もよくなりますね。

平野 水辺への関心が増えてくれば、水辺も増えてくるでしょう。それが、新しい京都の水の歴史にもつながっていくと思います。

今日は、長時間ありがとうございました。これからもカッパの遺伝子を全国に伝えていただきます。



盆地京都を庭園都市と見立てる

庭園は総合生活空間



白幡洋三郎

しらはた ようぎぶろう

国際日本文化研究センター教授
1949年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。主な著書に『庭園の美・造景の心』(日本放送出版協会、2000)、『大名庭園 江戸の饗宴』(講談社、1997)、『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の新生活』(中央公論社、1996)等他多数。

写真左

現在の神泉苑
(6ページ最終段に注があります)

水の都京都 実は都市計画が優先して できた都市

NHKが『アジア古都物語 京都千年の水脈』(日本放送出版協会、2002)の中で、地下水盆の上に平安京の都市発展があったというこれまでにない京都像を描いています。京都以外にも日本全国の盆地で、水とともに生きていくさまざまな文化があったと思いますが、京都は他の都市と比べスケールが大きかった。それで地下水盆の上に形成された都市として特に注目されたのでしよう。

とは言うものの平安京の計画段階で、すでに水の流れや地下水脈等が完全にわかっていたとはとても考えられません。やはり、政治的、心理的、宗教的感覚で立地を決めた部分が大きかったのでしょう。そして、いったん都市の形ができてから「しまった、えらいところに道路を造ってしまった」といった失敗を繰り返して、水とうまく折り合いをつけるやり方を身につけていったのだと思います。計画都市だからこそ、一つひとつ解決せざるを得なくなり、水と闘い、妥協・共存をしたところから知恵が蓄積されていきました。確かに水の条件は良かったし

かし扇状地で山が周囲にあつて、そこから川が流れ出るという構造を持った土地は、京都以外に日本中どこにもありません。京都が「水の文化」という点で関心を持たれるのは、他より抜きん出た都市を人工的に造ってしまった結果、困った事柄に解決策を与えてきたという知恵の蓄積のおかげだと思えます。これが水に関わる文化的蓄積です。

平安京以降の京都の人は、先に家を建て、水を探し、井戸を掘り、湿地帯を上手に住宅地に変える知恵で、水と何とか折り合いをつけてきました。「京都人は賢いから水を上手に使っている」と言うほど、京都人をほめる気はありません。先に都市計画を造ってしまったから、生きていくためには何とかするより仕方がなかった。鴨川もつけかえたり、堀川をわざわざ掘ったのも洪水対策です。水が出て困るから流路をつまく造ったというのがきっかけとなって、結果として水を上手に使うという文化に育っていきます。

私は「水と暮らす京都」という言い方を、キャッチフレーズとしてはいいと思っています。しかしそれは水のことを賢く良く知っていたというのではなく、必要に迫られ長い時間をかけて問題に適

という意味だと思えます。他の町だと数十年、数百年の歴史しかないわけですが、京都は1200年もの歴史がある。いろいろな人の知恵の中からうまいアイデアが生まれ、それが蓄積しているから京都はすごいというわけです。ただ、何といつても歴史があることはありがたい。

水と暮らすにはそうした長い体験の蓄積がいるということは、一種の教訓かもしれませんね。

京の庭園

元は貴族の別荘

東山の麓に東福寺という臨済宗の寺があります。25の塔頭(とうとう) (山内の寺院)を持ち、塔頭ごとに庭園を見ることが出来ます。現在は枯山水の庭が多いのですが、寺になる前は九条兼実(1149-1207)という貴族の別荘で、月輪殿(つきわら)と呼ばれていました。法然上人絵伝の中に、寝殿造りであった当時の月輪殿の庭園の様子が描かれています。流れる水に池があり、湧き水がありと、水のいろいろな形を取り入れ、素晴らしい総合的な庭園を造り上げています。

貴族の別荘として使われなくなつた後、寺として開山しました。鎌倉時代以降、禅宗の大きな寺として成長していきます。このよう

に京の庭園は、貴族が所有していた別荘から生まれたという一つの流れがあります。

例えば、宇治の平等院もそうです。平等院は1052年に寺になります。その前身は藤原氏の別荘「宇治院」でした。さらにそれ以前に、宇多天皇や源融げんじゅうの別荘地であった時期もあります。あの場所こそ、山紫水明と呼ぶにふさわしい場所で、宇治川の流れを前に水の別荘を築いています。もう一つ、嵯峨野も貴族の別荘地です。ここにも桂川があり、嵐山の穏やかな山がありました。

平安京の立派な庭園というのは、天皇の神泉苑を発端にして、支配階級である貴族が造り上げ、周辺の山並みと宇治、嵯峨野ででき上がったという見取り図が描けるでしょう。ですから、水が中世ぐらゐまで京都の庭に影響を与えていたのは間違いないので、それが後に、宗教施設に変化していきます。貴族にはやたらと子供ができません。後継者を作るためでしょうが、後継者になれるのはわずかな人間です。後継者になれなかった子供たちは、どんどん出家させます。多子化時代には収容施設が必要になってくるわけで、これが宗教施設の一つの機能でした。長男が家を継いだとき、他の子供が反対勢力となってケンカの種類にならない



ように、あらかじめ引き受け手となる寺を探しておきます。子供を寺に配し、生命の安全を保証し、政争に加わらないという出家宣言をさせる。文化というのは政治と離れたところにで上がるものです。京都は政争が激しかったからこそ、貴族の子弟に寺院で文化生活を営ませたことが、周縁部での文化を発達させることになりました。

和歌も、美術も、庭園もそうです。ですから、別荘に立派な庭園ができ、その後に宗教施設に引き継がれ、より精神的な裏付けも与えられていくのは、ごく自然な流れともいえます。

つまり庭園というのは、政治の世界から遠ざけられたがゆえに文化生活をする人が知恵を集め、腕によりをかけて造る美的な空間でもあるのです。これらが京都の鎌倉期ぐらゐまでの、庭園の立地の背景にある考え方ではないかと思えます。

庭園を育てる様々な経緯

また、政治とは「まつりごと」であって、「祭り」と切り離してみることができません。神の声を聞き、権威をもって命令を伝えるのが「まつりごと」なのです。

政と祭りのための遊興を行う屋

外の集会場が庭園です。せせらぎがあり鳥が飛んでくるような、しかし、蛇やムカデがいらないといった人間にとって快適な環境が造られていきます。これも、京都の庭園が洗練されていく流れです。

さらに、庭園には宗教的背景もあります。「奈良の仏像、京の庭園」という言い方がありますが、今でも奈良には仏像を見に行き、京都には庭園を見に行きます。奈良時代の寺院は、平地に法隆寺、興福寺、薬師寺などの伽藍を造りました。伽藍の中でも仏典の授業をする講堂が大切とされました。

今でいえば、教室にあたります。ですから、おそらく奈良時代までは庭園に興味がいかなかったのではないかと思えます。

平安京に移るころは、仏教の性格も変わってきます。奈良時代の僧侶は仏典を勉強した社会のリーダーでした。桓武天皇は彼らの政治的影響力から逃れることを一つの理由に、平城京から平安京に遷都を決めます。このため東寺と西寺は例外ですが、平安京には寺を造らせませんでした。平安初期の仏教者は市外の山麓に庵を造り、そこで暮らしました。周囲には清流や滝や岩山がありますが、宅地としての条件はよくない。そういう経緯があるため、京都の仏教は平安時代の初めから庭園と共存し

ていたのです。

桓武天皇は仏教を遠ざけました。貴族も人間ですから悩みも出てきます。そこで、屋敷の中に持仏堂を建てて、それを拝みました。寺は東寺と西寺の二つしか造らせなかったのですが、寺ではなく仏様に拝むのならば持仏堂を建てれば可能になります。そして、貴族が亡くなると持仏堂を寄進して、市内に徐々に寺ができるようになりました。

寺が結果的にこれだけ立派な庭園を持つようになったのは、このような時代背景があつてのことです。宗教施設がこんなに立派な庭園を持つているのは、世界にもあまり例がないと思います。キリスト教は自然を崇拜するのではなく、唯一神を第一としますし、神道も自然そのものの中に社を造るだけです。仏教だけが芸術的な庭園を育てたのも根拠のある話です。

水のある庭、水のない庭

庭園には、流れる水、溜まる池湧いて出る泉、といくつか水の要素があります。人工的な庭園という点で京都で最も古いのは、平安初期に造られてそのわずかな一部が残り、現在も二条城の南に隣接している神泉苑です。京都の最初の庭園は、池と湧き水が基本要素

でした。

神泉苑は、中国の四神相応の考え方にしたがって立地しています。つまり、東西南北を表す、青龍（東）、白虎（西）、朱雀（南）、玄武（北）の中で、宮殿の西南側に大きな池があることが、中国の都城計画の前例になっていたわけです。また、ここは東山、北山から流れてきた伏流水が溜まる所でもありました。この大きな池を文化的に解釈し、庭園化し、宮中の宴会はここで行っていました。

一方、水の無い庭園もあります。御所に紫宸殿がありますが、その南側正面は「南庭」といい、白砂が敷かれ、右近の楼、左近の橋が植えられています。ここは、家臣が天皇の勅令を聞くという儀礼に使うもので、水がない庭です。宮廷の「廷」という字に「まだれ」をつけたら庭になります。ですから、「庭」の原形は、水の無い場所です。「園」は植物で囲われている所という意味で、水が流れている。これらが結びつき、「庭園」という言葉になっていくのです。つまり、水のある庭、無い庭の2種類がある。

ちなみに、水のある庭に、かつては「苑」という字を当てていました。水も植物もあるし、流れもあれば泉もある。水を使う「苑」では、流水、溜まった水、湧き水

が使われ、総合的な庭園が造られていきます。

反対に、水を使わない「廷」は、龍安寺の石庭や、禅寺の枯山水に見られるような方向に発展していきます。つまり、水が流れているように見立てる様式が生まれてきます。この精神的背景には、水と石と木への憧憬がある。そのような精神から、知恵として生まれてきたのが枯山水のような様式でしょう。

庭園は求められる使い方 に適応してきた

町衆は京都の中だけで形成されたわけではありません。例えば、祇園祭を支えた町人たちも、貿易で栄えた堺とかかわりながら大きくなっていった。それを象徴しているのが、山鉾の飾りに使われるゴブラン織。日本の織物ではありませんから、海外貿易で利益を得たというシンボルとして見る事ができます。

中世末期の堺では、町なかで自然の暮らし、山里風の暮らしをしたいという人がいたようです。都会の住居に山里風の狭い茶室を造り、わび、さびの感覚を伴った空間を造る。海外貿易で繁栄し、人工的な都市生活を極めたときに、水とか木とか石といった自然に嗜

好が戻っていくのは、今と同じです。有名なのは「市中の山居」という言葉。ジョン・ロドリゲスというイエズス会の宣教師が書いた『日本教会史』（邦訳・岩波書店）という本がありますが、その中にローマ字綴りでこの言葉が出てきます。「堺の町人達の間、そういう趣味が最近流行っている。町中に自然風の小さな座敷をつくり、そこで茶を楽しむ」と。都会で失われた自然を楽しむ心情。それが茶室になり、坪庭につながっていく。これが京都に入ってきた。町民が庭園を考えるとき自由になるスペースの余裕がないものですから、茶の湯が「狭い空間でよろしい」と言ってくれたのは、

京都向けには都合が良かった。坪庭の他に、もう一つ庭という単語を使うのは、通り庭です。町屋では表通りから横を通り、座敷の中を邪魔しないで奥まで行ける通りがあります。これを京の町屋では、通り庭と言います。そこには、竈などが並んでいる。木もなければ池も川も何もない。そこで料理をつくりたり座敷に上げるものの準備などの作業が行われます。

このように、庭園には時代背景や使う人々により、いろいろな使い方や機能が与えられました。人間が作業をする場所として始まり、園は植物が育つ場所、室町時代までは石と水をアレンジした空間、江戸時代は森と泉を組み合わせた

空間というように、時代によって庭園に求められる機能が変わり、使い方が変わります。しかもユニケーションする空間でもあった。現在は、観光客が混み合う空間ですが。

各時代が求めた機能に適して造られてきた庭園の機能を、我々は上手に引き受けて使いこなしているかという、疑問に感じます。かつての人々は船遊びもすれば、月見の時は縁台を用意して酒を飲み、花見の宴ではワイワイ騒いだに違いない。庭園の形は残っているけれど、機能は萎んでいるのが現代ではないか。つまり、使う庭ではなく、ただ目で鑑賞する庭になってしまったのが現状ではないでしょうか。

私は庭園を「総合生活空間」と考えています。水もただ精神的にきれいと思っただけでなく、水を飲んで飲んだり、お茶を点てたり、使ってみる。水の機能というのはたくさんあるはずです。

庭園の使い方が次のライフスタイルのモデルになる。現代人は快適さを望み、夏は空調がなければ生きていけないと言いますが、庭園を通して自然とのつきあい方を学べば、屋外生活の復権や空調に頼った人工的な生活の見直しにつながるのではないかと、というのがその理由です。屋外の庭は見た



目にも美しいし、その空間を使つて食事をすれば一層おいしく感じます。庭園は、水に触れば心地よく、風を感じ、鳥の音が聞こえるといった、五感を総動員して感じる楽しみを再確認させてくれます。

なぜ

知恵は積み重なるのか

京都人は先人の知恵を尊重します。先人の蓄積を背負う生き方というのは、本人に新しい才覚がなくとも続けることができます。しかし一方では、先人の知恵を越えた、新しいものを考え出す必要もあります。新しいものは内部の人間だけではなかなか考えつきませんから、やはり、都に来てくれる人から吸収していったのでしょう。そういうシステムがうまく回転したことで、京都が都市として持続してきたのです。こうしたシステムがうまく機能しなかった所からは人が離れ、「私たちが守ります」といくら内部で言っても無理なのです。京都も、京都人がただ「守ります」と言っても無理です。全国から京都を守ってくれているわけですね。

都市を利用しにくる人々が、もし一攫千金だけを狙うようになると、蓄積と革新を生み出すような人間関係を築くことは難しいです。

よう。そういう意味で、東京では新しいアイデアは搾取されてしまふかもしれない。京都ではありがたいことに、新しいアイデアを外からもらい、古いくせに新しいかのように生き延びているという、まあ、えげつないシステムを1200年も続けてきています。でも、永続する都市というのは、本来みんなそういうシステムだったのだらうと思えますけれど。

「古いし、やってみたらどう」とまわりから応援してくれず。だから、やめられないですね。そういうことに反発して出ていく人もいなくはないのですが、なぜか歴史が繋がっていくのです。

京都を庭園都市にする

今、京都全体を庭園と見てはどうかと考えています。京都という都市を庭園として見立ててみれば、いかに水を上手に利用するかを考えると、汚さない、滞らせないための新しいアイデアが出てくるのではないのでしょうか。交通の邪魔になるから川を埋める、という開発理念から都市を守るためには、やはりコンセプトが必要です。これまでの暮らし方、水とのつながりを守るためには、京を庭園都市として見たいですね。

コペンハーゲンの街には、いたるところに写真のような駐輪場がある。ハンドルにセントラルのマップが付けられている自転車は、観光客用に見えるが、自転車移動が普及しているだけあって、市民の利用率も意外に高い。自転車は鎖で施錠されているが、500円玉ぐらいの20クローネコインで開錠できる。20クローネは鎖錠に納まったままだが、自転車を返すと戻ってくる。勿論、システムは皆同じなのだから、乗り捨てが自由。システムは簡単だが、それをカタチにするデザイン力、美しく仕上げるセンスを学びたい。利用したくなる格好よさと使い勝手、自家用との差別化などをうまくまとめている。



庭園都市というコンセプトですから、都市の利用者はできるだけ歩く。自家用車は辛抱してもらい、庭園都市京都の入り口で降りて散策する。海外には、自家用車は都市周辺部に駐車し、そこから先の都心部までは公共交通機関に乗り継いでいくパーク・アンド・ライド方式がありますね。京都でも、周辺の旧来の庭園の辺りにうまく駐車してもらったらいい。地下鉄と市電ぐらいいは残してもいいですね。それに加えて、新たに水の上を動くような交通機関ができればさらにいい。

この方式が各地で使われればおもしろい。盆地ならではの知恵と言えるかもしれません。



領域感覚からの発見は何を生み出すのだろうか

「何を見る」「どう見よう」は「どうから見る」



樋口忠彦 ひぐち ただこ

京都大学大学院教授

1944年生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。2003年より現職。主な著書に『景観の構造』（技報堂出版、1975）、『日本の景観』（筑摩書房、1993）、『郊外の風景』（教育出版、2000）他多数。

生息適地としての景観

私は、景観論の中でも「生息地景観論」というものに興味を持っています。『景観の構造』という本を約30年前に出したきつかけは、日本人がどんな場所を好んで住んできたのか、日本の都がどのような所に置かれ、その理由は何か、寺や神社がなぜあのような場所に置かれているのか、などを知りたかったからです。

同じころ、イギリスのアップルトンという地理学者が、「The Experience of Landscape（『景観の経験』、1975年）」という本を出しました。人間にとっての生息適地について書いています。「生息適地は人間にとって美しく見え、美的満足感を得ることがで

きる」というそれまでにない説が書かれており、私が考えていたことを言い当てていたこともあって面白いと思いました。

最近では生息地をハビタットと呼ぶようになり、ハビタットと景観を関係づける考え方が市民権を得つつあるように思います。景観という「見た目」に偏りがちな面もありますが、私はサステイナビリティ（人間活動が生態系の中で長期間にわたって継続されること）と景観が生息適地をめぐってどう関わるかということを考えて、生息地景観論を展開しようと考えています。

を選び取ります。しかし人間の場合は本能が壊れていますので、シンボリックに生息適地に見える場所を美しく感じる、というのがアップルトンの仮説です。

風水などもそのような見立ての一つでしょうが、風水をよく調べると陰陽の理論となって難解になります。日常的な景観を直接体験するのではなく、決まり事に沿って景観に説明をつけていくのが風水の特徴です。ある意味で生息適地の理論だから風水も最初は面白いのですが、私はあまり深入りしていません。おそらく風水は東アジアにおける生息適地を試行錯誤で探して、理論化、抽象化したものだと思います。どのような地形が生息適地になるかは風土により異なります。例えばイタリアでは生息適地はどちらかというと丘の

上ですしね。

日本人の生息適地

それでは日本人にとっての生息適地とはどのような場所なのでしょうか。たまたま、日本に最初に

都が造られたのはどこかと調べると、日本書紀の神武天皇の物語に行き当たります。神武東征の物語は、青い山々が四方を取り巻いている所を目指し、大和に入ります。日本書紀には、盆地を理想郷とするイメージが書かれていました。おそらく日本人の精神の古層の部分に、生息適地は山で囲まれている部分であるということがあったのかもしれません。そして、日本の農村風景の元型がどこにあったのかに興味を持ち、水分神社を調べました。私は、山

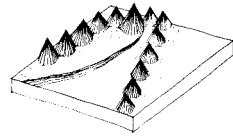
田にあったのではないかとイメージを持っていました。柳田国男が田圃の神様について書いた論考があり、その中にも水分神社が出てきます。

「大和のいはゆる青垣山の傾斜面に程よく分配せられた八所の水分神社なども、恐らくは今でも地形の比較によって、以前のものと単純な営田組織とその中心を為した用水分配の信仰を想ひ浮かべることが出来るであらう。広大な埋立開墾地の附加があるまでは、かういふ小規模な緩傾斜の谷あひが個々の生産単位と緊密に結合して、水を豊かに分ち與へたまふ神を、年毎に祭り続けて行くことが、全国普通の例であった」（柳田国男『田社考大要』、『定本柳田国男集』第11巻、筑摩書房）。この文献に触れておもしろいと

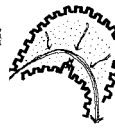
景観 7種類の地形空間

1. 水分神社型空間

山から流れでてくる水の田への最初のひき入れ口である水口、山から山麓の緩傾斜の地にうつる勾配変換の地の山側の丘陵端に神社は位置し、そこからこくわずかな傾斜をもって広々と田地が裾をひく地形である。神社に向かって奥まりながら周囲とりかこむ山、緩傾斜の田地、神社と田地を区切る川の構成する空間である。「古い土着の名残を留めた昔ながらの好風景の地」として、日本人の心象風景のひとつの典型でもある。



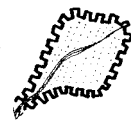
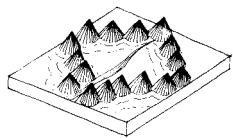
焦点：神社
境界：山、丘陵
境界・方向：川
方向：地表面の傾斜
領域：田地、平地



焦点：神社
境界：山、丘陵
境界・方向：川
領域：田地、平地

2. 秋津州やまと型空間

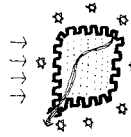
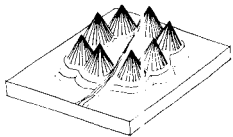
四周を青垣山がとりかこみ、そのうちに清流の流れる明朗広潤な平野である。『日本書紀』が神武東征の目的地の空間を「東に美き地有り。青山四周れり。」と描いたように、古代人のあこがれ求めた理想境「常世」の地形空間であった。平野とそのうちを流れる川、そして周囲をとりかこむ山の構成する空間である。



境界：山
境界・方向：川
領域：平地

3. 八葉蓮華型空間

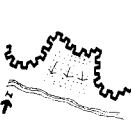
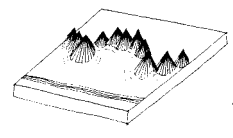
あたかも胎蔵八葉の蓮葉を表示するように、周囲を八つの峯がとりかこんでいる地形で、それは空海のいう「四面高嶺にして人縦みち絶えた平原の山地」である。「秋津洲やまと」と違って標高が高くなった深山であるが、周囲を山により閉鎖されている空間という意味では同じタイプに属する。



境界：山
目標・ランドマーク：八峰
領域：平地
方向：地表面の傾斜
境界・方向：川

4. 蔵風得水型空間

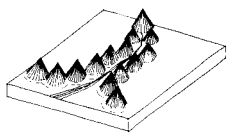
占地(立地)の理論としての風水思想によるもので、地中に流通する正気が水によってかざられ、風によって散らぬ場所を吉としたものである。一般に、後方(北)に山を負い左右(東西)に丘陵をもち前方(南)に平地流水を臨む地形をいう。占地(立地)の理論として大きな影響を及ぼすとともに、現実的意義もあって、きわめてよく目にするタイプである。方位および三方の山と平地そして水の構成する空間である。



境界：山、丘陵
境界：池、川、海
領域：平地
方向：地表面の傾斜
方向：東西南北

5. 隠国型空間

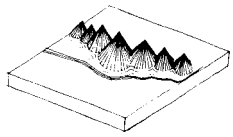
両側から山のせまる谷川を上流にさかのぼった奥にある隠れこもった場所である。そこは死霊のごもる場所であり、聖なる場所でもあった。両側から山のせまる谷と水の流れのつくりだす奥へ奥へと誘う空間と、その目標としての谷の奥処のつくりだす空間である。



境界：山
方向：川
方向：地表面の傾斜
目標・焦点：谷の奥処
領域：平地

6. 神奈備山型空間

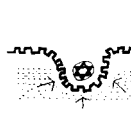
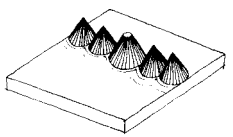
平地に近くあるいは平地に突出した、山容が周囲から目立つ小山で、山崇拜の対象としての霊山であった。この山は、周辺の平地のどこからでもそのむことができるということから、周辺の空間を集中化し組織づけている。



目標・ランドマーク：山、丘陵
方向：そびえる山
領域：平地
境界：川

7. 国見山型空間

神奈備山と同様、平地に近くあるいは平地に突出した小山で、周辺平地の眺望に資した。神奈備山が周辺の平地から仰ぎ見られる山であるのに対し、国見山はそこから周辺の平地を俯瞰する山である。



境界：山、丘陵
中心：山あるいは丘の上
方向：そびえる山や丘
領域：平地

思い、早速探しに行きました。イメージに合うのは都祁水分神社。あの水分神社は中世にできたのではないかとという説もあるのですが、源流ということで行ってみました。『景観の構造』ではこのような問題意識を出発点に、文献や実地調査によって抽出した典型的な地形

空間を、7つに分類し分析しています。空間を、7つに分類し分析して「何を見る」というよりは「どこから見る」

山水はどこにでもあります。風景というと見る対象のほつにばかり目がいくのですが、日本人にとって風景対象はそれほど重要でなかったのではないかと考えています。近代以降はひっくり返るのですが、以前はむしろ、眺める場所のほう

か。風景を体験する時と場所と機会つまりTPOを選べば日本人の生息適地が浮かび上がってきます。時は、その場所が一番美しい時期。機会は、そこで行われる催し物等。最後に残ってくるのが場所。時と機会はあらかじめ動かせないもの

ですから、どこから見るといった場所が非常に大事になります。どうも、東京の景観は「見る対象」をどんどん造っては変えていくようにも見えます。このような態度は文明開化以降、新規なものに憧れる心性から生まれたのかも知れません。明治時代以降、近代

的な構造物が出てきますから、新しいということでは視線が対象に向かっているわけですね。しかし本来はそうではなく、どのような場所から見るのかがいいか、つまり「見る場所」を考えるべきなのです。家の中となると屋外風景を選べないので、庭を造ることになります。「見る場所」は客間です。客間があるから庭があるのです。日本の場合、客間を考慮することのほうが大事なのです。

それは、景観の見え方と、「もてなす、もてなされる」という人間関係が深いところで繋がっているとも言えますね。

そうです。人間同士のもてなしの心ですね。結局、景観を体験するとは、人や自然との関係なのです。近代人は景観を「対象」とし

てしか見ない傾向がありますが、景観を感じ、体感するということは、人や自然との関係が豊かであることと言っても過言ではありません。

いろいろの人が水辺の使い方を発見し、どんどん提案していくと、再認識が生まれ水辺の風景も再発見される。川床にしても、最初は店もわずかしかなかったのに増えてきています。多くの人が、鴨川の水辺をそういう場所として認識するようになったからでしょう。このようにして生まれるちよつとした水辺への意識は、水や川に対する価値観をも育てていきます。

景観は発見される

生息適地を体现する景観を分類し、次には説明する理論をつくれば、今ある生息適地を見直したり、忘れ去られているものが再発見でき、各地の景観づくりに応用できると思っています。各地で異なる生息適地のパターンの読み方がわかれば、景観の価値が見えてくるはずですよ。

「景観というのは見方である」と文化地理学者のオギユスタン・ベルクが言っています（『日本の風景・西欧の景観』講談社、1990年）。つまり景観は発見され、再発見され続けるものというわけ

で、私もそう思っています。今まで意識しなかった人間と環境との関係を意識させ、違う見方で盆地に着目したり、水分神社がある地形と川や田圃の関係を意識して見直すと、今まで何気なく眺めていた風景が違うものに見えてきます。「景観を見る」とは、「見る側の人間」と「見られる対象としての景観」、そしてその「2つの関係を意識すること」でもあるのです。

私は、見られる対象には心地よさを感じさせるパターンがあるのだらうと思えますし、同時に、それを見る人間の側にも、対象を見て心に響く感性のパターンがあると思うのです。ロボットやコンピュータではなく、人間でないといけない、人間でないといけないパターンですね。景観というのは、両方の関係の中で生まれてきているものだと思います。

例えば、中国人は「山水」の風景を4世紀ごろに美しいものとして発見します。それには「道」という宇宙的原理に自然を重ね合わせた道教の見方が背景にあるのです。きれいな自然があるから風景を発見したのではなく、ある価値観が風景の発見をつながしたといえます。

そして、そのような風景を美しいと褒め称える漢詩が日本に流入します。そのころ、日本人はおそ



京都清水寺の奥にある水掛観音。周囲から水を掛けるのだが、観音正面には大きな石壁があり、口ウソクを立てて「拝む場所」が特別に設けられている。石壁を判り貰った額縁が、「どこから見るか」を示している。

らく独自の文化で風景を見ていたと思つのです。ただし日本人は、中国人と近い感性を持っていますから、中国人が「山河が美しい」と詠んだ漢詩に親近感を覚えます。

細かく見ればズレはあるのですが、表現そのものが面白いと思えば、漢詩にならうって歌を作り、それが和歌となる。接点のところでは自然に対する似た感性があるわけ



すが、和歌が詠んでいる風景と、漢詩が詠んでいる風景は次第に少しずつズれていくのです。

これとは対照的に、ヨーロッパ人は山が美しいとか、川が美しいという概念をキリスト教の影響で消してきました。そういうものを美しいと思うより、自分の心の美しさを見つめなさいという中世の文化が続きます。ルネサンスを迎えそれが薄れて、科学革命をへてルソーのような人が散歩の楽しさということを言い出します。彼は植物採集をやり、我々が小学校の理科教育で習うような目で自然を見ているのです。やがて、遠近法という技法と見方が出現します。さらに、デカルトが主張したように、物事はそれを認識する主体と認識される客体があり、両者は分離しているという考えが出てきます。「我思う、ゆえに我あり」というわけです。科学の発展、遠近法、主客分離の哲学、この3点セットで風景という感覚が生まれたというのが、西欧の定説です。ヨーロッパ人がアルプスの風景美を発見したのは18世紀といわれています。鉱山学、生物学、地質学が発達し、そこで美しさが発見されました。目から鱗が落ちたのでしよう。

ところが、この説明は日本人には全然当てはまらない。日本は主

客合一で、平気で対象に感情移入しますし、自然と一体化して自然を見るという見方が続きます。

つまり、道教の影響を受けて山水を美しいと感じる感覚、ヨーロッパ人がアルプスをきれいと感ずる感覚、そして日本人が自然を美しいと感じる感覚、この3つの景観感覚は異なるのです。

景観をめぐる

地域特有の物語

日本の場合は山の辺、水の辺が生息適地の元型で、一番美しい場所ではなかったかと思っています。それには理由があるのでしよう。山沿いという背景があり、風が吹き抜け、水が常に得られ、植物や生物が生育できるという豊かな生態系という重要な条件を備えています。

そのような水辺を都市部で復活させようとするならば、その土地の条件に合わせないといけません。東京ならば、そこに流れ込んでいた川を最大限生かすしかありません。

新潟で堀の再生が行われていまずね。最初はみんなそれほど熱心ではないようでしたが、行政も「現実的に考えなければ」という段階までできています。新潟は信濃

川の最下流で、江戸と同様に堀の

町だったのです。昔あった水みちを広げたりつなげたりするわけですが、そのような再生手法というのは、場所の持っていた魅力、特性を引き出すことにつながるのではないのでしょうか。

このように考えると、生息適地の発見には、やはり歴史の感覚が大事です。例えば、水をただ流すだけではなく、そこに物語をつくらなければならないようになってきました。物語の母体は、やはり土地の歴史です。人は歴史に一番納得するのは、かつて江戸は、こうなっていたのではないか」という推論から話を始めるのが感性に合っているし、価値観にも適合している。無理も生じないですね。自然の条件に適っていますから。

景観をめぐる「人と人」、「人と環境」の、どのような関係を生み出していくか。土建屋さんのまちづくりは、モノを造れば終わりというところがあります。そうではなく、景観というのは「見方」ですから、見方を発見し続けるプロセスを継続させることが大事なのです。実際には山があっても、そこに山という景観があると感じていない人はたくさんいます。例えば、かつてヨーロッパの人はアルプスの山をイボとか吹き出物とか腫瘍とか呼び、邪魔ものとして見ていました。それがわずかな期間

で、今、全世界の人が見ているのと同じ見方に変わっています。それだつて作られた見方だと思いますが、隠れていた山の美しさが見えるようになり、今は世界の観光客が集まるようになってきました。

ここからわかるように、モノが大事なのではなく、その見方が大事なのです。そして、それをきっかけに新たな関係をいろいろ作り出し、歴史を駆使して様々な物語を生み出していく。そうしないと、モノを造っただけで終わってしまいます。

新しい文化をつくるというのは新しい見方を生み出すことです。水の文化をつくり持続させることは、「人と水」との豊かな関係をつくり、持続させることです。

京都に来て一番感じるのは伝統の強さですが、それは歴史と物語の豊かさということでもあります。鴨川を見ても、ただ水が流れているわけではないのです。川とそこを利用する人々の関係が非常に多様です。景色というのはずっと見ているわけではなく、いわば刺身のつまのようなものです。ただ、それをきちんとつまにして、社交を楽しむということが京都にはあると強く感じます。毎週のように、川や神社などの美しい場所を使って催しを行うとか、景色を觀賞するのではなく、景色を舞台として

使い、活かしている。使うという意味で、生活と景観が一体になっていると実感します。

景観に サステイナビリティの 感覚を取り入れる

以前、新潟で、故郷の魅力を探そうという番組を作ったときに、一番視聴率がよかったのは、森と川とメダカの話でした。森と川の生態系とメダカがどのような場所に生息しているのか。これは、かなり一般的な関心なのかなと思っています。生態系を意識して景観をとらえるというのは、サステイナビリティの感覚に非常に関心が持たれている証しだと思います。

柵田には、1年中水があります。メダカが住める環境があるということ。新潟には柵田はたくさんあり、メダカのためにも柵田を保存しようということになりました。面白いもので、このように価値のある景観として意識されると、なおさら柵田が美しく見えるのです。価値あるものとして、見方が変わるわけです。ですから、景観というのは、その時代の価値観によって見え方が変わります。同じように、さまざまなサステイナブルな価値観が出てくると、それによって水

の見方も変わることでしょう。

現に、水辺のデザインも変わってきています。20年前は水辺に近づくことに価値が置かれ、親水と言われていました。今はまた違う考え方が表れ、生物がもつと生育できるような生物多様性を意識した水辺をつくるように変わってきました。そのような水辺を、親水護岸より価値を持つて見るようになっていきます。自然の見方も都市の見方も、サステイナブルという価値観が入ることで変わるので、今後、いろいろな発見をへて、見方や価値の多様性が新たに生み出されることでしょう。そもそも「サステイナブルな」というのは、究極的には今の時代で資源を食いつぶすなという意味ですね。私は、それを、多様な景観資源を食いつぶすなということと同じ意味だと思っています。

人と自然が一体化するような自然観とか、花鳥風月を大事にする自然観とか、そういう文化を日本人ができるだけ多様に守っていくと同時に、新しい価値観もそれと共存していくようにする。新しい景観をつくる場合、今まであった風景観、見方を壊すのではなく、新しい価値観を加えた上で継承すべきです。加えられる新しい価値観は、あるときにはサステイナブルかもしれないし、別の価値観に

なるかもしれない。景観のデザイン、開発の仕方にもこのような視点が求められるようになってくると思います。

盆地都市の強み 領域感覚を取り戻せ

盆地は山で囲われているために、領域感覚が明確に設定できます。世界がとめどもなく拡散し、捉えどころがなくなっている現在、これは重要な価値だと思っています。空間的なまとまりは、心地よさを与えられますし、心がなごむ場所としての安心感をもたらします。

世界中の前近代の都市の大きさを測ってみると、だいたい、10km四方に収まるのがわかります。江戸は12km x 10km四方です。パリもロンドンもローマもマドリッドもみんなそうです。人間が歩いて生活していた都市というのは、それ以上広がらなかったのです。今は便利ならいといとすぐに開発しますが、前近代ではすべての都市にそのような領域感覚というのがあったわけで、現代ではそのことを忘れてしまったのです。こうした規模に対する感覚の喪失は、車という交通手段を持つことで加速されていますが、生活に必要な大きさというものを現代人はもつと意識したほうがいいと思います。特

に景観を育てることが大切です。景観を育てることは、対象と見る人を育てることに繋がり、それによって人と環境との関係も豊かになっていきます。そのような循環が、機能することが好ましいと思っています。

さきほど日本の風景感覚の元型は山水であると言いましたが、この考え方がベースにあると、どこでも住処にすることができ、これは悪い面もあります。というのは、領域感覚が意識されない場所では、コンパクトな都市ではなく、とめどもなく広がるスプロ

ール都市を生み出しやすいということにもなるからです。

江戸には江戸のまとまりがあり、郊外には歩いて行かれる名所もありました。パリも同様です。城壁の外には田園風景があつて、自然を楽しみ印象画が生まれる素地があつた。そのような空間感覚をもつ一度再認識し、まちをつくっていかなくてはならないし、領域感覚を意識して都市を再生していかなくてはならないと思います。



白い四角は10 km x 10 km



水と町衆が生み出す暮らしの勢い



浜野 潔

はまの きよし

関西大学経済学部教授

1958年生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。京都学園大学を経て2002年より現職。主な著書に『人類史のなかの人口と家族』（共著、晃洋書房、2003）他。古文書に埋もれた庶民の一生や気候変動の歴史人口学研究を、京都をフィールドに精力的に展開している。

浜野さんと京都の関わりからお話をうかがえますか。

京都には 宗門改帳が残っている

私は、京都をフィールドに歴史人口学という学問を専攻しています。これは昔の史料をもとに、出生や死亡、結婚、移動、家族など人口にまつわる事柄を調べようというもので、第二次世界大戦後にフランスやイギリスで生まれた学問です。現在は人口統計が整備されていますが、英仏では古くとも19世紀半ばまでしかそろっておらず、それ以前はどのように人口が推移してきたのかわかりませんでした。ただ、西国はキリスト教国ですから町に教会があります。教会ではその教区に住んでいる人の洗礼、結婚、埋葬などの「教区簿冊」という記録を残していて、それを人口推計に使い始めたのが出発点です。

は長期にわたる伝統になっていたということがわかってきたのです。その研究が非常に注目されて、世界各地に広がっていきました。

日本で、この分野を本格的に伝えたのは速水融氏（現・麗澤大学教授）です。速水氏は「これは日本にも応用できるぞ」と考えました。なぜなら、日本には教区簿冊はありませんが、反対に、江戸幕府がキリスト教を取り締まるために作らせた「宗門改帳」という史料が全国にあつたからです。

宗門改帳には、各町の家数、寺の宗派、どこのお寺の檀家であったか、屋号と人名、そして判が押してあります。判は個人が押す場合もあれば、寺が押す場合もあります。何の変哲もない人口台帳です。1671年に江戸幕府が全国に（幕府直轄領を除く）宗門改帳を作成させる法令を出し、1870年（明治3）ころまで全国で毎年作られてきました。

この宗門改帳が京都では町単位で山のように残っているのです。町の史料というものは町の年寄をした人や、それを引き継いだ個人が持っています。残っていない所もたくさんありますが、京都には数百の町があり、みんなちよつと

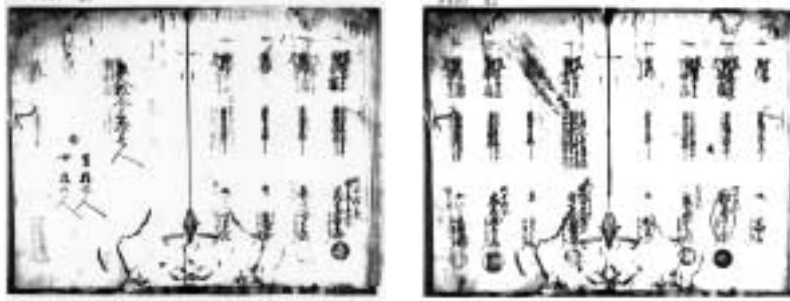
した文書は残っていますから、現在でも膨大な量が存在しているのです。

京都市が『京都の歴史』（1969〜76年）を編纂した時に、編者の一人であった林屋辰三郎氏のアイデアで、各家の文書の写真撮影をさせて頂いて製本しました。これは京都市歴史資料館に保管されていて、自由に誰でも閲覧できます。中学生が自分の町を調べに行っても、簡単に見ることができません。私は、東京から京都に移ってきて、この史料群を見つけた時に、一生京都にしようかなと思つたのです。

東京では、このような史料はまず見つかりません。江戸の史料はほとんど関東大震災や空襲で灰燼に帰しています。江戸は京よりも人口が多く、宗門改帳も多くあつたはずですが、数冊しか見つかりません。京都は一つの町で50冊くらい残っている所は、さらにありますからね。

江戸時代の京都は 町衆の自治都市

京都の場合、千年以上も続いているという言い方がされます。し



京都市歴史資料館蔵



宗門改帳から復元した住民基本台帳

宗門改帳(表紙:右、本文:上)を一点一点集めて、家ごとに台帳化したのが、BDS(Basic Data Sheet)(右下)。このBDSは西陣にある花車町の史料、熊野屋文蔵、妻のやそ、以下15名の記録。文政9年(1826)以降、名前の明記してある年には()が記入されている。当初、

宗門改帳に年齢の記載の必要はなかったが、天保15年(1844)以降、記載されるようになる。あとで年齢がわかれば、遡って年齢をうめることができる。

途中でいなくなるのは死んだのか、どこかへ行ったのか、ここではわからない。10歳程度でいなくなった場合、奉公に出た可能性もある。これを一軒ずつ作成してコンピューター入力すると、各年の人口を出すことができる。

英仏の教区簿冊では、教会の洗礼、埋葬のような、その時点の変化だけが記入されているので毎年の人口はわからない。しかし生まれてすぐに洗礼するので、1週間後に死んだとしても出生記録は残り、かつ1週間後の埋葬の記録も残ることになる。一方、宗門改帳には生まれてすぐ死んだ人は書かれていないため、乳児死亡がとらえられないという欠点もある。

国		花車町																									家番号		17				
姓	名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	計	男	女	計	男	女	
文政9年	(1826) 丙寅																										44	2	6				
10	(1827) 丁卯																										44	2	6				
11	(1828) 戊辰																										44	2	6				
12	(1829) 己巳																										44	2	6				
13	(1830) 庚午																										44	2	6				
天保2	(1831) 辛卯																										44	2	6				
3	(1832) 壬辰																										44	2	6				
4	(1833) 癸巳																										44	2	6				
5	(1834) 甲午																										44	2	6				
6	(1835) 乙未																										44	2	6				
7	(1836) 丙申																										44	2	6				
8	(1837) 丁酉																										44	2	6				
9	(1838) 戊戌																										44	2	6				
10	(1839) 己亥																										44	2	6				
11	(1840) 庚子																										44	2	6				
12	(1841) 辛丑																										44	2	6				
13	(1842) 壬寅																										44	2	6				
14	(1843) 癸卯																										44	2	6				
15	(1844) 甲辰																										44	2	6				
弘化2	(1845) 乙巳																										44	2	6				
3	(1846) 丙午																										44	2	6				
4	(1847) 丁未																										44	2	6				
5	(1848) 戊申																										44	2	6				
6	(1849) 己酉																										44	2	6				
7	(1850) 庚戌																										44	2	6				

かし、古代の京都は中国を真似た律令制度というトップダウン制度がなかなかうまく機能せずに、どんどん崩れていきました。左京は栄え、右京は人が住まなくなるといふ現象も出てきます。こうして当初の古代都市はどんどん衰退していきました。その過程で、例えば室町幕府ができれば、幕府権力が一時その中で新たな都市形成を行う。造っては衰退するということを繰り返した、と言つのが正確でしょう。

古代の京都と、中世末以降の町衆の京都は違つ、というのが私の考えです。そして、町衆の自治の伝統を基礎につくられたのが近世の京都です。

それに対して、大坂、江戸はそれほど歴史がない。江戸や大阪との比較はなかなか難しいのですが、例えば、江戸時代中頃、江戸から京にやつて来たある狂歌師が、街路の美しさに非常に驚いていま幕府がそのような規制を加えていることはあまりない。むしろ住民による中からの規制があり守られていたのです。ですから、今でも京都では高いビルを建てるに反対運動が起こりますし、バブルの時のような乱開発には批判が非常に強い。もちろん、東京でも問題になりましたが、おそらく京都ほど

住民が大反対したということではないでしょう。

私は7年ほど前に東京から京都に移り住んできたのですが、町内会活動、自治会活動がたいへんしつかり残っていると思いました。これはなぜでしょうか。ある意味では、京都の持っている長い伝統だと思います。例えば、ある時「運動会がある」と言われましたので、「小学校の運動会ですか?」と尋ねましたら、「町の運動会がある」とおっしゃるわけです。町毎に運動会がある。最近まで学校の運動会などは平日に行い、むしろ町の運動会を日曜日に、メインの行事として行っていたのです。もちろん、子ども町の運動会に参加し、すごく盛り上がります。なぜそういうことをするのかというと、防災という面もあるのでしょうか。よく言われるのは、「火を出すような人が町に住んでいたら大変だ」ということで、そういう意味で、町の規制は非常に強い。

江戸時代の京の人口は、あまり増えていないとよく言われます。京都に住むということは当時は大変なことで、その周囲の人、町が人物を鑑定して居住許可を与えたから、無闇に増えることがなかったのだと思います。引越してくる場合、借家人であっても保証人を立てるといふ厳しいルールが、当時



上京区千本今出川の北、現在の花車町

からありました。その保証人も、町の近隣に住んでいる人でないといけない。全然知らない人が保証人では信用しようがないからです。江戸の初期に、鴨川の河川敷きが住宅地になりました。新地とい「新開発された土地」という意味です。当時の町の史料を見ると、「新地ができる」と心配だ」とい

記述が見られます。スラム化を防ぎ町の美観を維持するために、妙な人が入ってこないでほしい、と心配したわけです。現在では、都市の人口が増える地域経済が活性化するので、町に人口を呼び込むとします。しかし、この考え方は、空間を高層化して利用することが可能という

前提があつてのことです。ところが、江戸時代に高層マンションなどありませんから、都市の人口が増えることは、そのまま過密を意味します。家主は家賃収入が得られますから人が住んでいてくれれば儲かりますが、過密は衛生環境の悪化にもつながっていきます。当時は、町が行政組織になつて

京都の人口趨勢

和暦	西暦	総戸数	洛中戸数	洛外戸数	総人口	洛中人口	洛外人口
寛永11年	1634	37,087				410,089	
寛文元年	1661				362,322		
寛文5年	1665				352,344		
延宝2年	1674				408,723		
天和3年	1683		37,544			271,332	
元禄3年	1690	44,771	39,805	4,966	350,549	313,021	37,528
元禄13年	1700	43,639	39,712	4,927	351,692	317,936	33,756
正徳5年	1715	44,907	39,649	5,258	344,379	302,755	41,624
享保7年	1722		40,849				
享保15年	1730	45,642			373,302	344,350	28,952
元治元年	1864	69,055	53,367	15,688			
明治3年	1870	98,935			369,874		

京都市『京都の歴史』第5巻(1972)第6巻(1973)第7巻(1974)を参考に作成

花車町の世帯の転入率と転出率

	転入率	転出率
文政期 1820~1828	0.19	= 0.19
天保期 1837~1842	0.20	< 0.22
開港前後 1858~1862	0.18	< 0.21

「花車町文書」による

おり、寄り合いも投票もあり、このような人の出入りもコントロールしていました。年寄は現在の町内会長で、輪番制であります。そういう町組織の強さは京の特徴です。行政はそのような自治組織にかなり丸投げしていたのが実態です。

なぜ中世末期には各地に存在した町衆組織が、江戸時代にも残ったのでしょうか。

基本的に自治に任せるなら任せよう、住民自治でうまくいくならば、行政が介入する必要はないというのは、江戸時代の考え方です。裁判でも、奉行所のお白砂で裁きをということではなく、できる限り当事者が和解調停したほうが良いという考え方が根底にありました。

ただ、京都が武士の極めて少ない町だから、ということがやはり大きな理由です。江戸は百万都市と言われても、半分は参勤交代で全国からやつて来る武士。彼らは役人でもあつたわけで、つまり江戸は役人だらけの町で、いわば住民の半数が公務員という奇妙な町でした。京都には、京都町奉行所とか京都所司代という行政機構はありますが、たかが知れています。ですから、町衆に任さないとうまくいくはずがないのです。

川は行政機構で

では町衆の自治に任せないで、行政が介入する部分があったのという、そうではない。それが川の問題です。

京都がこれだけ人口を抱えられたのには、水が重要な役割を果たしています。第1には、飲み水である井戸水、地下水。江戸は埋め立て地であるために、神田用水や玉川用水を造つてあれただけの人口を養つことができました。京都では、近代になつてもしばらくは井戸水でした。明治の京都の水道事業開始は遅いのですが、逆に言えばそれだけ水が豊かだったのです。第2には、運搬のために使われた高瀬川、西高瀬川などの水路は、流通の上で大きな役割を果たしています。

そして、第3に桂川、鴨川が農業用水として重要な役割を果たしていました。これだけの人口を養うために、京都の周囲の農村地帯では野菜を作っていました。現在の京都駅の南側の住宅地帯になっているあたりは一面の純農村でした。そこから採れるものが、行商の形で市中に運ばれていきました。食糧供給地がうまくいっていないと、京の人は満足に食事ができない。

ところが一転して、享保期（1716～1735年、徳川吉宗の時代）から長いデフレに入ります。新田開発の余地がなくなり、低成長経済になっていきます。1800年代前半までの約100年はデフレ局面です。このあたりから、まさに京都の人口は横ばいになるわけですね。デフレ圧力の中で、商品のブランド力と質を維持するために、やたらと人を雇わずに、できるだけ熟練度の高い職人を抱えたほうがいいと考えられます。では、実際はどうだったのでしょうか。

西陣の産業構造と人口推移

ここで京都の水ならではの織物を作っていた、西陣の話をしたしたいと思います。京都というのは、西陣を見てわかるように、ブランドを大事にし大量生産しない工業都市でした。したがって、西陣地区の人口が増えると、西陣織の品質低下が考えられるわけです。

西陣・花車町の宗門改帳からわかることは、まず、一定の人口が維持されているということです。ただ、これは人々が移動してないということを意味していません。動きは非常にあります。西陣で作る高級品は増産できま

せん。手間暇かけますから、人を雇っても急にうまくなるわけではないのです。そのため人を雇うのは何年かおきにして、時間をかけて一人前にすると、さらに何年か御礼奉公をしてもらった後に独立していくという雇用行動が生まれます。

奉公人は、西陣の中にたくさんいます。しかし、おそらく西陣という地域の中で奉公人を回していいのではないかと思うのです。つまり、西陣の人口の容量はほぼ決まっており、あまり外部から人が入ってこないということです。

機織屋が増え過当競争になり、質が落ちるのを防ぐために、江戸時代中期になると株仲間ができません。機織屋の数が増えないのですから、人口が増えないのも当然です。

ただ、西陣の人口が増えていないのは衰退ではなく、工業のあり方がそのような人口構造を求めているのです。西陣の人々は、人々をどんどん雇い、生産量を拡大することが自分たちの首をしめることをわかっていました。

天保期は、転入してくる人間より転出する人間が多くなります。これが、人口減少となって表れます。なぜ、天保の時に落ちるのか。従来は、天保の危機（1834、36年）と呼ばれる疫病の流行が

あり、さらにその後、天保の改革を進めた老中水野忠邦が奢侈禁止令を出し、絹物禁止令を出し、西陣にとって打撃を与えたことが原因と考えられてきました。そうであれば、天保の危機の後にさらに西陣の人口が減っているはずですが、ところが調べてみると、天保の危機で人口は減っているものの、天保の改革では人口はほとんど減っていないのです。改革に関しては江戸ではうるさく取り締まりが行われたけれど、京都でそれが実質的に機能していたのかどうか疑問です。これは通説に対する疑問点ですね。

さらに、開国（1854年）になると、国内で価格革命と呼ばれる現象が起きます。国内で生産していた生糸が、横浜から海外に流出するようになります。当時、たまたまヨーロッパで蚕の病気が流行り、絹糸の価格が暴騰します。そこで外国商人が日本の生糸に目をつけて、あつという間に買い取られて海外に出ていってしましました。西陣では織物を作ろうとしても生糸がない。そこで短期間人口が落ち、すぐには回復しませんでした。

文政、天保、開港と通して、ある家が翌年転出していく割合は約2割。常に一定です。人口が変動しているから、ある時期には人が

出て、ある時期には動かないと思うと、そういうわけではない。転入率よりも転出率が2〜3%高い場合があります。このちょっとした差で人口が変わるわけです。つまり、西陣の人口は、停滞しているのではなく、安定的に回転していると言った方がよいでしょう。

人間の「勢い」に水が関わる

ある面積に何人住むのが適当かということとはわかりません。狩猟採集民ということであれば、食物

に依じた最適人口というものがあります。しかし、農耕社会以降は生産性の向上により人口が稠密になることも可能になります。ただ稠密になると病気になるやすくなるという複雑な要素も出てくるため、現在では、適度な人口という解答はないというのが結論です。むしろ、何をもちて適度とみるかが問題になるわけです。それで今が適度な人口かどうかという判断は難しい。

環境により人口が決定されるという考え方がありますが、大事なことは人口が増えたり減ったりすると、そのような変化に適応するために、他の社会システムや生態系システムが変わるという面もあることです。こうしたシステムと

人口は、相互依存関係にあると考えるべきです。

その中で、水という要素がどのように関わるか。

歴史人口学というのは、人が「増えた、減った」という事実を探るだけではありません。現在、Demographyを「人口学」と訳しますが、明治時代では「民勢学」と訳しました。国の勢いが *genesis*、

現在では「国勢調査」と訳しています。かつては、国の勢い、民の勢いという言い方をしました。歴史人口学はこうした人間の「勢い」を探るものです。人間が勢いを得るために必要かつ、非常に重要なものが「水」です。水は病気も媒介しますが、水があるから人が住める。食糧生産や流通を支える一方で、洪水もあり、その対策として河川改修や暗渠もできる。水は恩恵をもたらすと同時に凶器にもなる。人間が生き活きと生活するために、水をいかに活用していったかを見ると、水と人口は相互に影響を与えあってきたといえるでしょう。

さらには人口の増減が、それに応じた水利システム、社会システムをつくる面も見逃せません。水は「勢い」を支える要素として不可欠な要素なのです。



第3回世界水フォーラム報告

編集部



2003年3月16日(日)～23日(日)の8日間にわたり第3回世界水フォーラムが、京都、滋賀、大阪という琵琶湖・淀川流域の3都市で開催された。参加者は世界約180カ国より24000名に及んだ。

世界水フォーラムは、地球全体の水問題を統一的に議論する場として設けられたもので、第1回は1997年モロッコのマラケシュ、第2回は2000年にオランダのハーグで開催されている。

今回討議されたテーマは「水と貧困」、「水と平和」、「水とガヴァナンス(賢明な水統治)」、「統合的流域及び水資源管理」、「水と食糧 環境」、「水と気候変動」、「水と都市」、「水供給 衛生及び水質汚染」、「水と自然 環境」、「農業 食糧と水」、「水と教育 能力開発」、「洪水」、「水とエネルギー」、「水と文化多様性」、「地下水」、「水と情報」、「水施設への資金調達」、「水と交通」などのテーマ。そして、この他にも「世界子ども水フォーラム」、「水ジャーナリストパネル」、「アフリカの日」など、特別セッションが組まれた。

会議のプログラムや、そこで提出されたステートメント、とりまとめられた「世界水行動報告書」は、世界水会議(WWC:World Water Council)のウェブサイトで

<http://www.worldwatercouncil.org>に掲載されているのでそちらをご覧ください。ここでは今回のフォーラムと「水の文化」という視点の関わりについて報告したい。

水問題とは何なのか

今回注目を集めていたのは「水と食糧」、「水と衛生」、「水とガヴァナンス」、「水と貧困」、「流域管理」などのテーマである。偏在する水資源をいかに公平にすべての人々に供給し、持続的に管理するかという問題に議論が集中した観がある。水はそれ自身が人々にとつての基本的権利であつて、水問題とは「Water for All(すべての人に水を)」を実現するために必要な公正な配分方法をめぐる問題であるという認識が参加者に共有されていた。

公正な配分を実現するために、市場だけではなく、何らかの効率的、効果的な統治の仕組み(ガヴァナンス)やコミュニティ組織の活用が検討されたし、そもそも公正という基準のもつ意味、人々を水を守る行動へと動機づけるには水にどのような価値を与えればよいのかなど、問題点は的確に並べられたと言えるだろう。

また食糧生産に投入される水量

まで考えると、日本は農作物の輸入を通して膨大な水輸入国になるという仮想水(バーチャル・ウォーター)についても盛んに議論の対象となつており、今後ますます解りやすい説明として普及していくと思われ。

水の配分にはルールが必要で、そのルールを各国の多面的な事情に応じて組み立てていくという点では、水管理の社会・文化的な側面の重要性が表われた会議だった。

水と文化多様性

水管理と文化の関わりを正面から取り上げたのは、「水と文化多様性」の分科会。このテーマの基に、「水の文化」、「水と文化の多様性」、「水と文化遺産」、「先住民の世界観とその精神」、「コミュニティライフと水管理」、「先住民の水に対するビジョンと権利」より良い水管理に新しい手法」といった具体的な論議が2日間に渡つてかわされた。主催組織も、ユネスコ、水アカデミー(フランス)、地域研究企画交流センター(国立民族学博物館)他、さまざまな機関によって構成された。

議論の目的は、水の文化的側面を開発戦略、行動計画と統合し、

水管理を進展させようというもので、そのために専門家、実践家、地域住民などさまざまな立場からの知識を交すこととしたわけである。

ところで、このテーマの基調になっている「文化多様性」とはどのような意味なのだろうか。

これは第31回ユネスコ総会で採択された「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」(2001年)で説明されている。大事な用語なので、重要と思われる第1条を紹介する。

第1条

文化の多様性…人類共通の遺産

文化は時間・空間を越えて多様な形を取るものであるが、その多様性は人類を構成している集団や社会のそれぞれの特徴が、多様な独特の形をとっていることに表れている。生物における種の多様性が、自然にとって不可欠であるのと同様に、文化の多様性は、その交流・革新・創造性の源として、人類にとって不可欠なものである。こうした観点から、文化の多様性は人類共通の遺産であり、現在および未来の世代のために、その意識が認識され、明確にされなければならない。(目黒ユネスコ協会 宮本美智子訳)

生物的多様性と文化的多様性が対応する価値として位置づけられているが、文化の多様性が交流・革新・創造性の源であるという理由で尊重されている。生物多様性条約(1992年)では、種の多様性の維持そのものが目的であるが、文化多様性は、創造性を生む基盤として価値があるという。同じ多様性でも、種レベルでの生態相維持を目的とした「生物多様性」と、人間の創造活動の基盤としての「文化多様性」をきちんと分ける程度の気遣いはしておきたい。

今回の水フォーラムでは、このような意味で文化多様性を尊重し衆知を集めることで、水管理に関するさまざまな問題を解決しようというわけである。

このテーマは、国内外の参加者とも多く、基調講演を建築家の安藤忠雄氏が行い、その後、貴船神社宮司の高井和夫氏がスピーチを行うなど、冒頭は「水の象徴性」について語られた。

土着の知

一方、水の文化は世界各地に存在する以上、このような会議の場にあつては、世界各地の土着の知(Indigenous Knowledge)をいかに水管理の実践に結びつけるか

が問題となる。つまり、地域固有の知恵をどのように実践に移すかが問題となるわけで、これについては大いに目を開かせられた発表も多かった。

ポリビアやカナダの先住民の代表は、現在淡水に接することできない人間の多くが先住民と言われている人々であり、かつ、そうした人々は水利の知恵を持っていると力説し、水問題には多様な人々が公平な立場で意見をかわすべきだと主張した。土着の知を含めた文化多様性を尊重する前には、さまざまな障壁が横たわっていることを実感させられた分科会でもあった。



以下は、発表者の論題のいくつかを抜き出したものである。これらから発表者の言わんとするところをイメージしてもらいたい。

- ・ 伝統知識の保持者
- ・ 先住民マオリ族の水への展望
- ・ 湿地帯の文化的価値についてのラムサール会議
- ・ 水についての考え方…水と文明の歴史から
- ・ 水を共有する…水と文化的多様性についての教育プログラム
- ・ コンゴ人と川の文化的相互作用…国際協力のための伝統的なデータベースとして
- ・ 京都の文化遺産を地震火災から守る環境的な水供給システム
- ・ メキシコにおける先住民と水資源のコントロール
- ・ 公共的な水と私的な水…モンゴルの遊牧民と伝統的農耕民における水管理とコミュニティ

水と文化の声明文

以下は、「水と文化」というテーマで取りまとめられた声明文である。

前文

1 文化の多様性に関するユネスコ世界宣言(2001年)および持続可能な開発に関するヨハネスブルグ宣言(2002年)は、地

球の資源の賢明な利用と管理のために人間社会ならびにさまざまな文化が対話し、協力することを強く求めている。水は、経済、生態系、社会および精神的な機能を有する貴重な資源である。したがって、その管理が持続可能性を大きく左右する。社会生活におけるその基本的役割ゆえに、水は強力な文化的側面を持つ。我々が直面する水に関連した問題の文化的側面を理解、考慮することなくして、持続可能な解決策は見つからない。

課題

- 2 人と環境の関係は、文化に内包されている。
- 3 水について考え、またその価値を認め、理解し、管理し、利用もしくは濫用し、崇拜もしくは冒流する、その在り方は、我々が帰属する文化の影響を受けている。
- 4 水は、肉体、感情および精神の命である。単なる経済的資源として考えるべきものではない。水の共有は、倫理的責務であり、人類の連帯の表明である。水と人類の親密な関係は、あらゆる意思決定過程において明確に考慮されなければならない。
- 5 外から取り入れた解決策が多数の場合成果を上げていないことから明らかのように、水資源管理は、このような文化的影響を十分

に考慮することなしには失敗するだろう。

6 人間社会によって数千年をかけて創り出されてきた文化多様性は、持続可能な実践と革新的なアプローチという財産となっている。在来の知識を持つ人々を科学者とともに、水に関連した問題の解決策を見出す上での正式のパートナーとするべきである。

7 在来の生活様式として知識は人類の遺産ならびに文化の多様性にとって不可欠な部分である。先住民族は、持続可能な水資源管理において果たすべき重要な役割がある。これに関連して、先住民族の権利を十分尊重しなければならぬ。

目的

8 変化を遂げる世界において我々の適応能力を確保するために文化の多様性および遺産、知識、法のおよび社会的共存を保持し、さらに強化する。

9 統合的水資源管理（IWRM）における参加型の意思決定は、文化多様性のあらゆる側面を考慮に入れ、情報に基づいた合意を求めべきである。

10 意識啓発、教育および能力開発のための資料や方法の開発に当たっては、文化多様性、ステークホルダーの関与および異文化間対

話を指針とするべきである。

11 国連教育科学文化機関（ユネスコ）、科学的知識と科学技術の倫理に関する世界委員会（COMEST）ならびに関係諸機関やネットワークは、上記の資料や方法の開発に向けて適切な手引きを作成するべきである。

行動計画

12 第3回世界水フォーラムのテーマ「水と文化」の結果を公表し、教育機関に広く周知させるべきである。

13 水と文化（文化多様性と遺産の側面を含む）の関係に関する独立した作業グループを設置するという世界水会議の意向を歓迎し、専門職団体に對しそれぞれの活動プログラムにおいてこの問題に明確に取り組み、これらのプロセスに先住民の参加を得ることを求める。

14 科学会議や専門会議において関連性のある在来あるいは慣習的な知識や実践に関するセッションを設ける。

15 上記の行動や取り組みの実施を促進するために、倫理的枠組みとともに、立法・制度政策の策定を推進する。



「世界子ども水フォーラム」

新旭町での異文化体験

滋賀県新旭町は、琵琶湖の北西岸、安曇川の下流に位置する人口おおよそ1万1千人の小さな町だ。ここに3月17日（月）〜18日（火）、ケニア、マラウイ、アンゴラ、タジキスタン、中国など海外12カ国の10代の子供たちと町内の児童、約50名が集まった。彼らは世界子ども水フォーラムの参加者で、新旭町の正伝寺に泊まり、湧き水体験などを行ったのである。

この試みは、新旭町と水と文化



滋賀県新旭町環境課の阿部能英さん

研究会が共同で行ったもの。今回は、新旭町の担当者である環境課の阿部能英さんにお話をうかがった。

外国の子供たちの受け入れというのは、なかなか得難い経験でした。

そうですね。去年の春に話は聞いていましたが、最初は5人くらいだろうと思っていました。人数が固まってくると、40人くらいになるといことがわかり始めてあわてて各課に協力を求めました。増えたのはうれしかったのですが、やはり現場の仕事は、正直言って大変でした。

食事の準備で地元の各区の保健委員さんや、宿舎になった正伝寺

の檀家さん、針江地区の区長さん、いつもこうした子供たちとの交流を手伝ってくれるおじいちゃん、おばあちゃん、学校、いろいろな方が手伝ってくれました。

このあたりは水とコミュニティの関係が生きているわけですか。

安曇川が天井川になっているため、今回子供たちが調査した針江地区だけではなく、くぼんだ地域から伏流水があちこちに出ます。上水道も通っているのですが、そういう土地では昔から伏流水を使っています。洗濯は水道で行い、飲料水は地下水を使うという家が多いですね。



染めの体験プログラムに参加した子供が作ったTシャツ。当日はとても寒い日で、水を使った作業で冷くなった手をストーブで温めるうちに、かけ声とともに自然と手拍子が始まった。さまざまな国の言語やリズムがいつの間にか一つになり、Tシャツ完成の祝いと慰労を歌い上げる。この交わりのスタイル、祭りの原形ともいえるエネルギーが、開催地に残っていったものは計り知れない。

海外のことで予想外のことはありましたか。

「誰の水か」という、所有権のことを気にしている子が多かったと聞きました。家の前に流れている川を見てどのように尋ねたというんですね。ですから、共有の感覚が違つたのでしょうか。そして、水を使うルールが決められていることに驚いていたのが印象に残っています。私は、そういうルールというものは、どこの国でもあるものかなと思っていました。もうでもないのだということがわかりました。

また、水がきれいなことに驚いていたようでした。それと、糞尿を畑に撒いている家がわずかに残っているのですが、それにも驚いていました。針江も大半は下水なのですが、糞尿を肥料にするようなことをしていないと言っていましたね。昔は水を使う日本のようなルールがあったようですが、イギリスの植民地政策で合理化が進められ、逆に水が汚れてきたという話を聞きまして、そういう伝統自体が守られてきていることが珍しいのかなと思いました。

また、宿を引き受けていただいた正伝寺の住職は、「水を守るルールがあるのが正しいことなん

だ」と、改めて知り、逆に、守ろうという意識が強くなったと言っていました。受け入れ側は当たり前前と違ってしまいました。川の文化は大切な財産という思いを新たにしました。

住民の方もおもしろがってくれました。子供さんが来て、励まされた。川掃除は自治会単位で年何回か行い、水を大事にしている町ですので、ほめられるとうれしいですね。

これからは、海外交流も都道府県レベルではなく、基礎自治体レベルで活発になっていくと思うのですが。

やはり経験することが大事ですね。そして単独ではできなかったと思います。今回も、水と文化研究会のようなNPOの協力があったらうまくいったのかなと思います。パートナーが大事ですね。

町のバックアップも大事ですが、少数でも担当者がやる気になればできると思います。親御さんも海外の子供と接することを喜んでくれました。

実は去年から「新旭 世代をつなぐ水の学校」という水の環境学習をしていますので、普段からナマズを食べさせられたとか、魚つかみをしたとか、子供が家でいる

いろと話をしていると思うんです。おじいちゃんを呼んで子供に魚つかみさせるつもりが、おじいちゃんの方が夢中になってしまつて、網を貸してくれない。そうしたらナマズが捕まつて、保健センターでさばいて食べたんです。「かわいそう」って泣いている子どももいましたけどね。

その後、男の子が立ち小便をしてたら、近くのおばさんを連れて来て注意させたとか。そういう子が出てきました。

あと集落の中で湧き水探しをしましたから、参加した子ども頭には地下水を利用している家には「カバタ」（井戸水を水路をつかって溜めて洗い物などをする場）があつて、鯉がいます。鯉がいます。鯉がいるから、ここは地下水だという、経験基準ができてきている。そういう学びは大きいですよ。生きていく上で、この町で生活していく上で。

針江に住む方々もだんだんインタビユーされることに慣れて、おじいさん、おばさんにとつても過去の経験を生かすいいチャンスにはなつたと思います。子供が行くと喜んで話してくれます。すると、今まで以上に元気になる。これも大きな効果ですね。



第七回 水の文化楽習 実践取材

新聞発行から学ぶ こころ言葉

第3回世界水フォーラムを取材する「水っ子新聞」

8日間に渡り国内外2万名以上の参加者が意見を戦わせた、第3回世界水フォーラム。その会場では、青と白のジャンパーを着て首からプレスカードを下げた子どもたちが取材に走っていました。彼らは「水っ子新聞」の子供特派員。会期中に4回発行された、日英

2カ国語新聞の記者たちでした。

専門家と呼ばれる大人たちに物怖じもせずにコメントを取る姿。子供たちによる新聞づくりも、ちょっと工夫すると、日頃意識しない社会の約束事を楽習する格好のプログラムになるのかもしれない。



左から日本語版編集長を務めた葛西映史子さん、世界子ども水フォーラム副代表の塚本明正さん、同じく事務局長の小丸和恵さん。このほかに多くの協力者が「未来の大人」たちのために集まった。



上：プログラムが終わると、目指した人のもとへまっしぐら。数人の子ども特派員と通訳をしてくれるサポーターの迫力あるインタビュー風景に、大人の記者もつい輪に混じって聞き耳を立ててしまう。アメリカの農夫のリアルな話から、子ども特派員は敏感にからだ言葉を感じとっていく。

左：子ども特派員全員が、公式のプレスカードを着用しての取材となった。子ども特派員が大人の記者と肩を並べて取材できるよう主催者側が配慮したのは、ほかに類を見ないのではないかと。



国際会議は約束の場

18世紀に生きたイギリス、スコットランドの哲学者デビッド・ヒュームは、コンベンションという言葉に特別な意味を持たせた。大ざっぱに言えば、人々が約束を交わすのに前提としている、社会で周知された共通の問題関心や考え方、という意味を特に強調したのである。この一見古めかしい哲学者の考え方は、コミュニケーションに携わる人々の間で、現在関心が高まっている。

国際会議を、英語ではコンベンション (convention) と呼ぶ。英和辞典を見ると、1 代表者大会・その参加者、2 協定・協約、3 世間のしきたりや慣習、というおおよそ3つの意味が載せられているはずだ。最近では、プロ野球のドラフト会議のことを「プロ野球コンベンション」と称して開催しているの、聞き覚えのある人もいるかもしれない。

コンベンションとは、「共同体の意見を出し合い、ものごとを決める場」であり、人々との約束であり、それを守る人々でもある。この「共同体の意見を出し合い、ものごとを決める場」がないと、みんなが個々の知恵や歴史的蓄積を出しても約束は守られないかもし



「水っ子新聞」第1号（A4版6ページ）（左）は2002年12月に発行された。創刊準備号の3冊は日本語のみだが、水フォーラム開催中のものは、日本語と英語が表裏に配置されたA3版。（上）

れないし、社会に認知されていかない。

世界水フォーラムのような国際会議は、共同体の知恵や歴史的蓄積を集め合意して約束するという側面と、それを社会の共通認識に変えていくという二つの側面を持つ、まさに「コンベンション」の典型であろう。

子ども特派員による国際会議の取材／新聞発行は、共同体の知恵や歴史的蓄積が、広く一般に認知されるための橋渡しを実現した例として取り上げた。

子どもではない 子ども特派員

今回は、日本語版編集長を務めた葛西映史子さん、世界子ども水フォーラム副代表の塚本明正さん、世界子ども水フォーラム事務局長の小丸和恵さんにお話をうかがった。取り組みを簡単に紹介すると、

デジタルカメラやパソコンを使い、学校にあるような印刷機でも作れそう。ただし、国際会議参加者に読んでもらうため、表は日本語裏は英語となっている。会期中の発行日は3月16、18、20、22日とある。つまり、取材、原稿作成、構成、翻訳、印刷の作業をほぼ1日半ですませていることになる。

子ども特派員は総勢30名、7歳から14歳（当時）の男女小学生だ。この試みをサポートしたのは世界子ども水フォーラム京都の事務局のみなさん。代表を務めた嘉田由紀子さんは、「子どもは必ずしも教育される存在ではない」と言う。ただ、ここで急いで付け加えておきたいのは「子ども」という言葉の意味。実は私たちが普通に使っている小中学生を指す「子ども」という意味ではない。サポーターの大人たちは、「数年後には大人になる小さい大人」という意味で使っている。

「川とまちのフォーラム・京都」世話人代表も務める塚本さんは、「流域のことを考えるのに、子どもたちの意見を聞かなくては始まりません。子どもたちの意見は10年後の大人の意見ですから。子どもと大人の相互作用が大事なんです。ですから、環境教育という言葉はやめよう、ということになりました」と語ってくれた。

水フォーラム8日間の会期中に4回発行され、子ども特派員により取材、制作された新聞が「水っ子新聞」である。読者は、会場の人たち。日本では年間数千件のレベルで国際会議が開かれているが、おそらく、このような取り組みは初めてのことはないだろう。初めのことではないだろうか。実物を手にとってみると、新聞はA3の白黒印刷1枚。これなら、



特派員の活動範囲はフォーラム会場だけではない。清水寺などの屋外でも精力的な取材が繰り返された。



別に特別なことをしているわけではない

そうは言っても、一見すると別に特別なことはしていないように見える。以下は、このプログラムの活動記録である。

2002年11月

もしも蛇口が止まったら？ 西部アフリカのマラウイ共和国のお話・水のことを考えてみよう

いきいきライブイベントینگ 加藤登紀子さんが子どもたち用につくってくれた水と生き物のうた

「生きている琵琶湖」を聞きながら巨大アートに挑戦

12月

びかびかどろだんご作りと土と水のお話 どろだんごを作って土と水の関係を知ろう

新聞講座 新聞記者さんから取材の仕方を伝授してもらおう

2003年1月

京都の「いいもの」見に行こう！ 京都の老舗駄屋店「駄嘉」に取材

琵琶湖博物館へ行こう 自分なりのテーマをもって博物館を取材

2月

子ども新聞社会議 伝わりやすい記事ってどんなだろう？書いてきた記事の編集・添削 本能寺跡地古井戸取材 跡地を

見学して昔の人の水とくらしを知る
子ども新聞社会議 車座会議に向けての取材計画
水を学ぼう子ども車座会議 参加団体の人たちに取材

3月

子ども新聞社会議 水フォーラム本番に向けての取材計画

本番の取材

本番終了後 子ども特派員同士で、感じたことを話し合う座談会

6月

関係者全員が集まり、子ども特派員が感じたことを発表し、意見を交換しあう報告会

興味深いのは、このプログラムが単なる「水フォーラムの記者体験」ではない、ということだ。むしろ、記者体験をきっかけにして水について感じたり、水をめぐる大人たちの知恵や約束事に触れる場をつくることに意味がある。そして、子どもたちがその場に身を置いて何を感じたか、この体験から何を受け取り何を捨てたか、何を継承していったかと思ったのか、そこまでの過程が丸ごと体験できる仕組みになっている。まさに、水についての知恵や蓄積が、周知になっていく過程のまるごと体験である。

キーポイントは、まず、身の回りの出来事を素直に感じ取るために、「もしも蛇口が止まったらど



世界子ども水フォーラムの清水寺会場のプログラムは、「聞き水」で始まり、日本の子供たちによるレポート発表、懇談ののち境内に飛び出した。特派員の積極性に加え、通訳などサポーターの尽力に感動。英語やフランス語を使っただけの会話なのだが、風土や言語の違いもさることながら、世代を越えてのコミュニケーションの仲介はさぞかし大変だっただろうと想像するが、サポーター自身が楽しんでいる姿が美しかった。



うなるか想像する」とか「泥団子を作って、土と水の関係を体で感じてみる」といった体験をとおして、自分の感覚を磨くことから始めている点だろう。

この後、実際に新聞記者のみなさんに講師になってもらい、取材の方法、記事の書き方について教えてもらった。講師となったある記者は「『なんで？』を探して、『へえー』が多ければ、その出来事は一面に載ることが多い」と体験談を話した。サポーターの方々はいろいろな苦労があったと思われるが、身の回りの取材から始めれば、別に特別に準備が大変ということはない。

子どもたちの議論

葛西「水道を作ることより、まず先に女の子の水汲みの労働を楽にしてあげる方法があると思わへん？ 松尾君ならどうする？」

松尾「えっ？」

松尾「水道を作ることより、まず先に女の子の水汲みの労働を楽にしてあげる方法があると思わへん？ 松尾君ならどうする？」

松尾「えっ？ 水汲みに行くまでの道を切り開いていく(女の子笑)」

葛西「切り開いて、女の子に水汲みに行ってって言う？」

松尾「車を探します(みんな笑)」

葛西「清水君はどうする？」

清水「遠くではなく、近くに水が汲める場所ができればいいと思う。」

実際の新聞記事はホームページにアップされているので、そちらをご覧ください。こととして (<http://www.kodomo-mizu-machi.acrweb.com/sinbun/sin01/>)



上：新旭町で開催された地域ステイプログラム。木原茂喜特派員（右）は取材活動だけではなく、母校の水道システムを世界の子どもたちに解説したり、トイレを案内したりした。

右：子ども特派員の「水汲み」に関する発言は、あたま言葉ではない。単なる取材に留まらず、世界子ども水フォーラムに集まってきた人たちとの交わりの中から自然に生まれた言葉のように聞こえた。



下：新旭町の針江地区には「カワド」が実際に使われている住宅がまだ残っている。この「カワド」は流水の上上台所が張り出すだけではなく、台所に湧水がある。郡上八幡の水舟（12号参照）と同じく、円形の水舟の廻りには残飯を待つ魚が泳いでいる。フォーラムに集まった世界の子どもだけではなく、日本の子ども特派員も、家主による「カワド」の説明に聞き入っていた。



井戸を掘ったりとかすると思う」
葛西「じゃあ、あゆちゃんやったらどう思う？ 自分が水汲みをやっていて、例えば清水君とか松尾君とか、山田君とかが学校に行ったり、家で勉強していたりしたらどう思う？」
北川「手伝ってよ！」
葛西「て、思うよなあ。まずそつやと思うねん。女の子が重い水汲みに行つて、男の子だけが教育を受けている、交代したらいいやんつて思うよなあ。重いものを持つているんやから手伝つてよつて思うよなあ」
田中「加藤登紀子さんが言つてはつたけど、途上国とかも全部水道にしちゃつたら、今世界にある水がすぐになくなるつて言つてはつてんけど、それが今言つていたことにつながらがあると思う」
山下「そつやね、水が全部水道で出るよつになつたら、すぐになくなつちやう。でも教育が受けられない女の子がおつて、教育が受けている男の子がおつて、じゃあどうしたらいいんやろ？ あゆちゃんやつたら『手伝つてよ！』つて言つたやん」
山崎「交代したらいいやん。仕事と勉強」
山下「あゆちゃんやつたら、どう手伝つてもらいたい？」
北川「水汲みとかでも、やっぱり

いつも4時間とか12時間とかかけて行くんじゃなくて、男の人とかも、今回は女の子がやつたんやから、次は男の人でみたいな」
山下「さつき女の子達が『手伝つてよ！』とか理紗ちゃんとかは交代にしたらいいやんつていつていたけど、それを含めて考えて、松尾君やつたら水と教育のことを考えて、どう解決する？」
松尾「身近なところで水が得られるよつに、井戸を掘る技術とかそつういのを学んで、行つ」
これが子どもたちと呼ばれる特派員の議論なのである。水汲みの話にはなつてはいるが、ここで交わされた水を前にした格差の問題それを解決するために出された方法の微妙なずれは、実は、大人たちの会議でもなんら変わることはない。いや、話が具体的である分特派員の議論のほつが明晰といえるかもしれない。
こつした取材と議論の経験をへて、特派員の間で問題意識は共有できたことだろつ。そして、これから一人一人が考えたり話し合つたりして、多様な解答を出してくることだろつ。彼らのやりとりを見ると、共通の議論の土俵を持つことが大事なのだといつことを感じさせられる。そして、共同体の知恵や蓄積がこつした過程をへて、周知となつていくことが大切だと



世界子ども水フォーラムの共同宣言がまとまり、会場が盛り上がる。参加者としての感動と、新聞特派員任務完了の安堵が入り交じった図。



フォーラム終了3カ月後の6月1日に開催された、子ども特派員報告会には、特派員を送り出した学校の先生や、家族が集った。「参加してから、子供が家で水道水の使い方に敏感になった」などの意見が聞かれ、ハレの舞台上でつかんだ言葉が、新聞をつくるだけで終わらなかったことが証言された。家庭や学校での日常生活の中でこそ、「あたま言葉」が「からだ言葉」や「こころ言葉」に変化していくことが実感させられる。家族や先生、友人との新しい関係のなかで、その言葉がもまれ、行動を生みだしていくことは素晴らしい。



いっことを実感させられる。

あたま言葉 + からだ言葉

この新聞の発行世話人である嘉田由紀子さんは「あたま言葉、からだ言葉」という言い回しで、二つの異なる知識のありようを表現する。あたま言葉は、体験なしで考えた抽象的な難しい言葉。抽象的だからどんな場合でもわかった気になる。逆に、からだ言葉は体験に根ざした身近な瑞々しい言葉とかく、大人は頭でっかちで、あたま言葉を使いがちである。

今回のプログラムでは、新聞を作るという体験をとおして、子どもたちがあたま言葉にからだ言葉をぶつけていく環境をつくらうというもの。

あたま言葉、からだ言葉のどちらが大事か、というのではない。国際会議場には、あたま言葉が飛び交っている。それを子ども特派員は、あたま言葉とからだ言葉の両方を使って取材する。この経験は、自分たちが腹の底から納得する意見を述べるための「こころ言葉」を体得する訓練の場となったのではないか。そついう意味からすると、あたま言葉もからだ言葉も、両方とも必要なのである。

さて、水っ子新聞の例は、何も大きな国際会議に限った話ではな

い。現在、日本中の地域の河川、地下水、雨水、海、実に多くの水辺で、さまざまな団体が活動を行っている。それらの活動の中で、共同体の知恵や蓄積をこころ言葉に直して、広く一般社会の周知に翻訳していく働きは、子どもこそが大きな鍵を握っているのではないだろうか。

今回活躍した子ども特派員は、今後、どのように水に関心を向けていくのだろうか。6月1日の報告会で発言した特派員、徳永莉紗さんの言葉を紹介して終わりたい。「水フォーラムは全体をとおして、水が豊かな国と貧しい国で論点が分かれていた。

アフリカは、生きるために、疾病にかからないために、水をどう使うか。水が豊かな国、例えば、アメリカやオランダでは、舟を使うことでの、がどう変わるかと、洪水を防ぐとか、より快適な暮らしを得ることが論点だった。

この2つが交わって、水の乏しい国と水の豊かな国の間でやりとりがあると、互いに得るものがあるのではないか。

この子どもたちが大人になったとき、こころ言葉で語った水についての問題意識、感想は、社会の周知の考え方になっていくに違いない。



盆地都市を想像する

京都はなぜ1200年も続いてきたのか。この謎が今回の出発点である。

そのような大きな問いに、答えが出せるはずもないのだが、京都を題材にすることで、水の文化と都市の関係が見えてくるかもしれない、という淡い期待もある。そこで、今回は、肩に力を入れずに京都の謎で遊んでみたい。

京都の地下には巨大な地下水盆があり、その水量は琵琶湖にも匹敵する。このエピソードは水に関心を持つ人々にとってはちょっとしたニュースだったようで、昨年NHKの番組で紹介されて以来、多くの方々から話の枕詞として聞くことが多くなった。

確かに、豆腐、湯葉、西陣織、川床、友禅染め、貴船神社、等々、京都には川や井戸水と上手につき合ってきたために生まれた事物が数多い。市中に井戸や湧水も

多く、水が得やすい土地柄であることが感じられる。

ホテルやトンボの生息数に水量が関わっているのと同じように、都市が人口を養う力(人口支持力)を水の量が決めているのであれば、京都が持続されてきた大きな要因として豊かな水を挙げたくもなる。しかし、果たしてそのように言い切れるか。

もしそうならば、第1に、天気に依存している高地や、乾燥地帯に都市は存在しないこととなる。しかし、実際にそのようなことなく、人々は水を気にしながらも少ないなら少ないなりに都市を築いてきた。

第2に、本当に京都は水が豊かな土地だったと言えるのだろうか。この疑問については、「琵琶湖疏水」建設当時の逸話が参考になる。1890年(明治20)に造られた疏水は、産業遺産などではなく、

現在も京都市民の重要な社会基盤として機能し続けているが、建設の目的は第一に琵琶湖との舟運路の確保、そして、途中からは水力発電が大きな目的となった。この疏水プロジェクトと工部省技師田辺朔郎の奮闘を描いたのが、田村喜子『京都インクライン物語』(山海堂、2002年、新版)だ。



この中に、著者は当時の京都府知事北村国道と農商務省の南一郎平との間で、京都の慢性的な水不足を憂える場面をはさんでいる。

「閣下が琵琶湖疏水実現に熱心な

のも無理ありません。京都は予想以上に水利に乏しい町ですね」

「鴨川をこらになりましたか」

「京都衰退の原因は遷都にもよるでしょうが、水不足が遠因ともいえますね。この現状では産業を興すどころか、飲料水にもこと欠くんじゃないですか」

「維新のころ、地方から上京したわれわれも、飲み水不足には困りましたよ」

「その点、太閤秀吉は先見の明がありましたな。太閤さんは伏見に城を築いた。伏見ならたつぷりした宇治川からの水利が考えられますから。もし鴨川に潤沢な水があれば、この風光明媚の地に構えたはずですよ。鴨川は水源からして水涸れでした」

どうも明治初期の京都は、水を利用する庶民の間では、「水不足の土地」として意識されていたらしい。

い。しかも、表流水だけではなく、井戸水さえも涸れることがあったという。

現在の京都は疏水のおかげで水の心配はない。また、菓子、豆腐や友禅染めなど、井戸を深く掘り地下水を使い続けて何百年もの生業を続けてきた所は多い。しかし、一方で、利用できる水が多いとは意識されていなかった時代もあったのである。

「地下水量の豊かさ」「暮らしの場面で使える水の豊かさ」とは、ストレートに言いきれそうにない。むしろ、都市に住む人々の求めに応じて、水が豊富なら豊富なりに、少ないなら少ないなりに、技術と文化で水を引き、それを管理する社会の仕組みをつくる。琵琶湖疏水はそのような都市に暮らす人々の勢いと水との関係の象徴にも見える。

同じことは、自動車交通が欠か



今も残るインクラインの線路

せなくなっている現代の都市でも言える。人口が増え、都市が巨大化すれば、大量の水を遠方から取水し、大量消費して排水するというシステムがで上がる。

居住者の求めが、水を調達する力を生み、その結果大量の水が集まる仕組みができた場所、それが都市だと言えなくもない。しかし、そのようにしてできた大都市は、いつかは壊れてしまつたのではない。そのような不安もあり、持続可能な都市、つまり無理せず続く都市とはどのようなものなのか、今手探りで考えられている。

拡大して続くか 無理せず続くか

それでは都市が持続する、つまり人口が変動をしながらも持続し

ていくのはなぜなのだろう。そもそも、なぜ人は都市に集まって住むのだろうか。

この疑問には、次のような説明が与えられている。最初は行政の中心地や市として都市が生まれ、多くの人が集まる。多数の人が集まれば、多様な人が集まり、さまざまなチャンスも生まれる。職にも食にも困らないし、仕事をするにも住むにも便利である。そして、その便利さがより多くの人を呼び込む。この循環は、人が集まれば集まるほど拍車がかかるわけで、「もう住めない」というくらいまで混雑して不便さが増さない限り、都市に人は集まるといっているのである。このように人が集まることで生まれる現象を、都市の集積効果というが、一言で言えば、人が集まるから集まるという理屈である。その反対に、都市から遠い場所では、

人がどんどん都市に向けて流出し、過疎化が進むことになる。集積と過疎はコインの裏表なのである。

現在の東京である江戸は、その良い例だ。江戸の町は、当時は東京湾に注いでいた利根川の低湿地に造成された。水道が造られ、参勤交代の効果もあって人が集まりだし、後背地では食糧増産のための新田開発が行われたために、さらに人口が増えていった。当時は、人口が増えれば環境も不衛生になりやすく、病気が流行することもあった。地方から都市に人が吸い寄せられそこで亡くなっていく現象を、「都市蟻地獄説」と呼ぶ人もいたが、明治になって近代水道も引かれ、江戸はどんどん肥大した。それは高度成長期も同様で、郊外にベッドタウンが立地し、そこで生活する人々の求めが勢いと

なって、都市化が加速されていった。しかし、一方で地方の過疎化も進んだ。

つい最近まで、都市は拡大する人口を収容し、それらの住民に活躍の場を与えるために一層拡大する、という循環が続いてきたのである。

では、拡大によってではなく、無理せず続く都市とはどのような都市なのか。これが、実はよくわからない。

集積と過疎のバランスがとれたコンパクトシティ

わからないときは、歴史に学ぶのが一つの賢明な方法だ。そこで目につくのが京都である。

京都は1200年も続いている。もちろん、平安時代末期や応仁の



清水寺の音羽の滝は観光スポット

乱など衰えを見せた時期もあったが、現在も持続し、近世以降は山紫水明と呼ばれるほどに快適な居住環境を提供し続けてきている。人口も江戸時代はおおよそ30万人程度。現在はマンションが建つたリ、南方に都市化が進み京都市人口はおおよそ130万人となつていいる。これだけの都市でありながら、職住近接で遠距離通勤も多くなはなさそうだし、小路に入れば道幅と建物の比率も快適だ。適度な都市の集積がありながら、居住するには心地よい。集積と過疎のバランスがとれた都市。それが京都である。

この「程の良さ」がどこから来るのだろうか、という問いに、「盆地だから」というのは大胆すぎるだろうか。東京のように都市が横に広がるつに、京都のような盆地では広がりようもなく、南方に向かつてしか拡大できなかった。

都であつたために適度な集積があり、都市が持続していく程度の人を惹きつける機会があり、なおかつ盆地であるがために人口がそれほど拡大してこなかった都市。これは無理せず続いてきた都市の一つの型と見てもいいのではないだろうか。

ちなみに、このように都市機能が適度な地域にまとまっている都

市をコンパクトシティと呼ぶ。コンパクトシティは、集積で得られる効果と過疎が招く影響のバランスを、土地に応じて適応させた都市とも呼べそうで、盆地都市である京都もその一つに入りたい気がする。

抽象的な知識と 地域固有の知識

都市にはさまざまな人々が集まるが故に、最新で多様な意見や考え方が集まる場所でもある。若者がミュージションになりたければ、東京や世界の大都市ニューヨークを目指すのも道理である。都市に行けば、先端的であると同時に抽象的な理屈、つまり一見、どこにでも通用するかと思えるような知識を身につけることができる。

一方、過疎地ではこのような機会が少ないかもしれないが、その地域固有の知恵というものがふんだんに残っている。都市の集積と過疎という対比は、都市で得ることができ知識の性質、抽象的知識と地域固有の知識の対比とも重なるのである。

水の利用や管理については、この地域固有の知恵が欠かせない。第3回世界水フォーラムでもIndigenous knowledge（土着の知恵）という言葉が話題になった

が、この種の知識の重要性をかねてから指摘していたのがクリフォード・ギアーツ『ローカル・ノレッジ』（岩波書店、1999年）である。



集積と過疎が適度なバランスを持った都市は、抽象的な知識と地域固有の知識の両方が尊重される都市でもある。京都もかつては日本の中心地として抽象的な知識の集積地でもあったが、一方で、京都固有とも呼べるような伝統へのこだわりを維持している古都としても知られている。

盆地都市を守るための スケール

このような目で、改めて日本全国の盆地を眺めると興味深いことが浮かび上がってくる。盆地の底には都市があり、大体はその中心部を河川が貫通している。盆地と一口に言っても、川沿いに細長く広がる北上盆地のような場所もあれば、京都や甲府のようにいくつもの川筋が集まり、豊かな大地を

形成している所もある。山辺では水が得やすいし、適度な勾配があるため用水も流しやすい。また常に山が見え、空間的な安心感も得られる。一方、盆地の底は湿地である場合も多く、川が氾濫しやすいリスクも持っている。さらに、郊外に都市化が広がっていくような後背地を持たないため、おのずとコンパクトに収まってしまいう都市、それが盆地都市だ。

かつて司馬遼太郎が『この国のかたち』の中で、「谷こそ古日本人にとつてめでたき土地だった（中略）村落も谷にできた。近世の城下町も、谷か、河口の低湿地にできた」と記しているのは、こうした盆地のイメージのようにも思える。

この盆地という地勢が影響を及ぼす文化のまとまりを「小盆地宇宙」と捉え、多数の小盆地宇宙による日本文化の地域多様性というアイディアを出したのが、米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』（岩波書店、1989年）



だ。この中で米山は、文化統合にはレベルが存在するとし、「コミュニティより上で国家よりは下のレベルを、盆地宇宙という言葉で一つの意味ある地域単位として位置づけた。

盆地というのは、人間の生息感覚を生かし、都市の持続を考える上での地域単位としては、なかなか良い単位なのかもしれない。盆地の持つ空間や文化のまとまり感、さらに言えば、なわばり感覚を生む苗床にもなりそうだ。

「ここは自分が暮らし、稼ぐための住処である」と思つと、人には「自分たちの共同の資源がある場所」という意味で「なわばり感覚」が芽生える。漁師は漁場をそ



用水をつくり直したときに出土したお地藏さんが、位置を変えずに奉られている。

のように見立て、漁師は山をそのように見る。このなわばりという言葉から、共有資源（コモンズ）の管理をわかりやすく説明しているのが、秋道智彌『なわばりの文化史』（小学館、1995年）である。



なわばり感覚を持つのは、何も漁師や猟師だけではない。都市で居住し、都市だからこそ暮らしている人にとって、都市はまさに共有資源であり、守るべきなわばりであるに違いない。しかし、都市が巨大化しすぎると、自分のなわばり感のスケールに容易には収まらなくなってくる。目に見える範囲で都市がまとまって感じられる規模の空間というのは、都市を守っていく上でも意味のあるものではないだろうか。

京都の小宇宙

それでは、盆地都市に住む人々の考え方というのは、どのようなものなのだろうか。京都人につい

て書かれた書物は数多いが、人土のつき合い方という文化の根幹をなす事柄を大変率直に語ってくれているものに、村田吉弘『京都人は変わらない』（光文社、2002年）がある。



著者は京料理店の主人。これは京都人についての箴言集ともいえるべきものだが、面白い部分を抜き出してみると

「（同業者は）商売敵というよりも、みんなで京料理を守り立て、良つなつていこうという考え方で。どっちみち一代では大したことではできませんから、今後、代を重ねていくなかで、いい関係を続けていきたい。いずれ自分の孫が世話になるやるといふ気持ちがあるから、みんなの世話を進んでできる。商売には、長い年月のあいだにはどうしても浮き沈みがあります。誰かのところがしんどいとなれば、世話をしてあげる。いつか自分の所もそうなつたら助けてもらわんとならんからね」

ここには、料亭家業を背負って

いる主人のしている目線の広さ、時間感覚、家業を続けるということとを目的にした合理的な協力関係が透けて見える。

「京都人、とくに僕らのように商売をしている人間にとって、何よりも優先する価値観は『存続すること』です。百年後も存続しているためにはどうするか。この考え方がすべての根底にあり、判断基準となります」と言い切っている。そして、「僕は自分の商売を企業やと思つてません。家業やと思つてる。（中略）企業は利益追求が目的ですが、僕らは目の前の利益よりも、存続の道を選びます」といふ。

京都の人が皆このように思っているわけではないだろうが、著者の言葉からは京都の文化が個人のレベルでどのように捉えられているかがよくわかる。かつて京都は天皇や公家に最高の料理を提供するための先端の知恵が集まる場所であつたわけだが、同時に、京都固有の心持ちというものも存在したことが理解できる。そのバランスの妙に、読み手は大いに納得させられてしまふ。

文化という面で都市を持続させるものは、文化の多様性を産み続けていく伝統的な気骨、それを合理的と感じさせる社会の暗黙の了解のよう仕組みが背景にあるの



京都 錦市場

だろう。そこには現在にも生きている町衆の伝統と、京都を自分たちの住処と見る盆地の空間感覚が大いに影響を与えてきたと見るのがいかならうか。

無理せず続く都市とは、多様な知恵と土地の伝統をミックスさせて継続させられる都市なのかもしれない。

盆地都市対平野大都市

さて、盆地と流域は英語で言つと同じ単語の basin。流域は、分水界で囲まれた範囲（集水域）で、降雨を集める河川の範囲に相当することから、英語では盆地と同じ用語が用いられているのである。

盆地と流域という言葉の持つ共通の意味は、河川の上流と下流域を一つの循環単位として見ることである。第3回世界水フォーラムでは流域というキーワードが何度

も用いられた。水を流域単位の循環で捉えなくては実効的な政策を考えられないというわけだ。このように、都市の水循環を「集水域」から見る眼差しを「盆地都市」の視点と呼ぶならば、対極にあるのが「平野大都市」の視点である。

平野大都市は、河口部、港湾に適した海辺などを中心に後背地の平野に向けて拡大し、結果として大都市となったものである。都市の集積効果がどんどん進み、必要な水はどんどん増えるために、取

水源がどんどん遠方に広がってしまい、水の循環範囲からはみ出してしまふ。これは、水を消費する側から見た都市像である。

このような対比は、なかなかおもしろい想像ではないか。やはり、これからの持続する都市を考えるときには、流域という地勢の単位は無視すべきでないと思うのである。京都が、都市形成の上で地の利となつた盆地を生かしたように、水の循環範囲を無視することなく平野をも流域の意識で捉えれば、新しい都市づくりの在り方が見えてくるはずである。

もし時間があるならば、あなたや仲間の住む土地や水の歴史を調べてほしい。どんな物語が発見できるだろうか。自分が「守る」といふなればり範囲はどこまでか。昔の水はなぜその場所を流れ、どのように使われていたのか。人づき合いにはどのような心遣いをしていのか。自分にとって暮らしやすい都市とは、どのような都市なのか。

歴史を振り返ることで、心の住処の盆地都市を想像してみたい。そこから、その土地に応じた、身の丈に合った「無理せず続く都市」像、第二の京都が生まれるのではないだろうか。



夏の京都水風景

松井 恵

祇園祭り

6月の終わりから7月始め、京の町家では必ず夏を夏の簾戸に替え畳の上には藤の敷物を敷く。軒先には簾をかけ陽が差し込まないようにする。表の格子戸から奥の庭に至るまで風が吹き抜けるように考えられている。梅雨も明けきらない7月の10日過ぎ、京都のあちこちで祇園祭のお囃子の音が鳴り始める。数多くの鉦があつてそれぞれお囃子の音が違うのだが子供たちは皆「コンコンチキチン」「コンチキチン」なのである。

京都には数え切れないくらいの祭りがあるが、一大イベントはやはり祇園祭りである。街中が祭り一色に変わり、いつもとは違う特別な時を迎える。常、平生は質素倹約を旨とする街衆もこのときはかりは年に一度の晴れの日々なのである。7月17日はメインイベント山鉦巡行で、鉦が街中の大通りを回り、角を曲がるのであるが、これが一番おもしろい。割った青竹を大きな車輪の前に並べ、何度も水をザアツとかける。車輪が、水に濡れた真つ青な竹に乗りかかると、一斉に鉦を斜めに引っ張るのである。鉦先に音頭とりの2人の男性が扇を広げ「ヨイヤサー」と掛け声をかける。何度か引っ張って青竹の上を90度滑らし次に進むのである。うまい辻回しは2〜3回で回り大喝采を浴びるのだが、下手な鉦は5〜6回もやり直す。

都が京都に移った後、疫病がたびたび流行し、それを封じるため863年(平安時代)、神泉苑で行われた御霊会が祇園祭の起源と云われている。なぜ疫病が多く発生したのか、一般的には都に多くの人口が集中することにより、ゴミや排泄物で水が汚染され疫病が蔓延したと考えられている。遺跡調査で、井戸跡と雪隠(トイレ)が並んで発見されていることが多いということでも想像がつく。かつて2〜3m掘ると水が湧いてくるほど、京都は地下水の豊富な所であった。

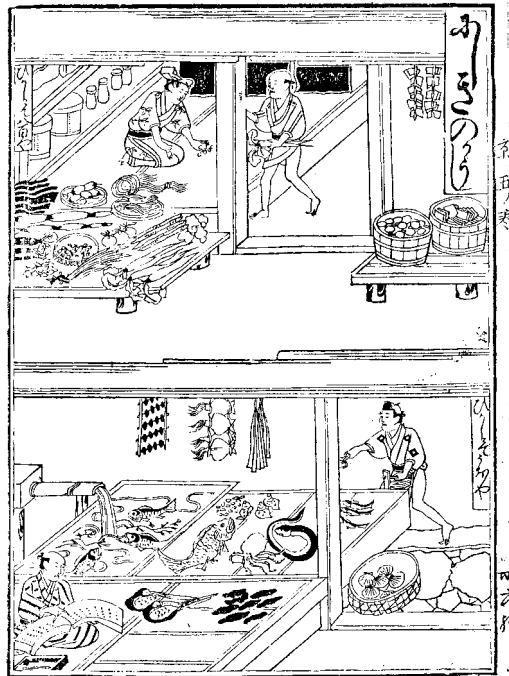
京都の夏

7月も終わりごろになると、うだるような暑い日中、尽きることのない蝉の音、京都の夏は特に暑苦しい。盆地特有のくそ暑さ(何と言われてもこの言い方がピッタリとくる)にピタッと止まった風。本当に風がないのである。何でこんな京都に生れたのかと思うことが何度あったことが・・・。

子どものころから夏は大嫌いであった。母に額や首すじに天花粉(ベビーパウダー)をつけて貰い、ゴロゴロと転がりながら座敷から庭の縁を眺めていた。

陽が少し傾いたころ、父の「表に水撒いてこい!」という店先からの指令が、突如飛んでくる。私は跳ね起き、飛んでバケツに水を汲み、杓で玄関先の通

『京雀』の中の錦市場



松井 恵
まついめぐみ

京都環境アクションネットワーク代表
1950年京都市生まれ。NHK金沢支局ニュースレポーター、石川の水を守る会、京都水環境研究会、を経てエコライフ京都副代表、現職。第3回世界水フォーラムでは「京都の地下水と文化」シンポジウムを開催し、「聞き水」を2,000人に体験していただいた。



貴船川の川床

りに水を撒く。何度水汲み場と表を往復し、撒き終わって通路に立つと家の奥からスーッと冷ややかな風が吹き始めた。

私の家は千本通りの材木屋であったが、京都の街の商売屋はどこでも奥行きが深く、50〜100mもあるものも少なくなかった。そして通路が真直ぐに奥へと続いているせいか、風がよく通り、打ち水は本当に魔法の水であった。

特に暑い夕べ、父は早々と店を終わって子供たちを急いで風呂に入れ、こざっぱりとした服装をさせ、呼んだタクシーで家族そろって出かけることがあった。

嵐山から10分ほど北の清滝まで行き、川床で夕食を食べるのである。支度ができるまで子供達は川に足をつけて待つ。用意ができるころにはあたりが暗くなっていた。京都の街中とは比べものにならないくらい涼しくなって、子供心に別天地だと思った。そのうちにだんだん寒くなり鼻水をたらす羽目に陥るのだが……。

ときには貴船、嵐山の鶴飼と夜の川はとくに涼しく、多くの人が涼を楽しむに出かけた。鴨川はあまり子連れで行く所ではなかったらしい。

京都の夏を過すにはいろんな知恵があり、私の子供のころは現代より粋で贅沢な過し方をしていたし、自然との過し方をよく知っていたと実感している。

自然の冷蔵庫

京都の台所といわれる錦市場の起源は、都が京都に移ったころに起こり、天喜2年（1054）錦小路と改められたという、大変歴史の古い市場である。

安土桃山時代、豊臣秀吉天下統一後、街の中心部にあたるこの場所に清冷な地下水が湧き出るので貯蔵庫として魚鳥の市場ができたのである。本格的な魚市場となったのは江戸時代元和年間（1615〜1623）で、今なおずっと同じ地域で市場があり続けている。

京都盆地の気候から見ても魚、肉が保存できる訳がなく、ひとえに地下水のおかげであると考え、江戸時代に京都の職人を綴った『京雀』という書物の中に錦市場の描写があり、なんと大変痛みやすいホタテ貝やサザエ、鯛、タコ、海鼠、干イカ、鮎、鰻あるいはハモ、そのほかに雉、生け簀に鯉、と沢山の魚、鳥が店頭に並び、販売している様子が絵に描かれている。これを見て大変ショックを受けた。

今でも保存に使っていた冷蔵庫代わりの井戸が1つ残っているというので、早速見せてもらった。現在は伊豫又というお鮎屋さんで元は魚屋だったと聞いている。井戸は、階段で降りていける降り井戸で、中は普通の井戸より少し広く地下冷蔵庫といった感じ。確かに冷っとしていた。地下水の上に箱に入れた魚を浮かせたり、吊っておくことで保存ができ、この井戸を考えた昔の人の知恵と発想に大変な驚きを感じた。

京都の風土、気候等考えるに、決して住みやすい土地ではない。しかし恵まれた地下水をしっかりと利用して産業、文化、生活と発展させてきた。悪条件を克服する知恵を持ち、自然をよく知ってうまく利用してきたからこそ、1200年もの間この町が続いていると実感した。ますます京都が好きになってきたかな……。





水の文化書誌 ⑤ 《京都の水》

「やがて山紫水明という言葉が感性的にびつたりするようになる頃に平安京という都がこの盆地に出現した。今から千二百年ほどの前のことである。建設の指令者である桓武天皇は自分の理想とする土地を発見してさぞ満足をおぼえたことだろう。山容の美はさりながら大勢の人間を養うだけの水が豊富にあったからである」と、田中阿里子は浅野喜市写真集『四季京の川』（京都書院、1987年）に書きとめている。

京都は北東に鴨川、東に白川、西に桂川が流れ、やがて淀川に合流する。中央部には無尽蔵ともいわれる地下水が存し、至る所で名水が湧き出す。さらには明治23年、第一次琵琶湖疏水、明治45年、第二次琵琶湖疏水の通水がなされた。これらの水が京都の人々と文化と生活を支えてきている。

2003年3月20日、第3回世界水フォーラム京都国際会館の会場で、私はケニアの人から「ジヤパン・グレイト・ネーション、ビュートイフル・キョウト」と話しかけられた。春の陽ざしを受けて京都は瑞々しく輝いていた。ケニアの人を魅了する京都の水景美について、橋本健次・写真川端洋之・文『京都水景色』、水野克比古・写真『京都雨景』、横山健蔵・写真『京都鴨川』の写真集が1997年に光村推古書院から出版されている。

名水については、京都新聞出版センター編・発行『名水を訪ねて京都・滋賀・健康ウオーク』（2001年）がわかりやすい。染井（梨木神社）、桐原水（宇治上神社）等の名水を散策できるようになっている。

駒敏郎著『京洛名水めぐり』（本阿弥書店、1993年）では、北野天満宮の太閤井戸、御神用水、三斎井戸をはじめ江戸時代文献が丹念に考証されており、巻末には江戸時代の名水一覧も掲げられている。

京都に多くの名水が湧き出る所以は、豊富な地

下水盆地が存在するからである。この水盆を科学的に検証したのが、NHK「アジア古都物語」プロジェクト編『京都千年の水脈』（日本放送出版協会、2002年）である。その中で、関西大学工学部楠見晴重教授は「京都盆地の地下の砂礫層に存在する地下水の量を211億トン、琵琶湖の貯水量である約275億トンに匹敵する数値である」と解析されていることには驚く。

京都の地下水は「金気」が少ないため、この豊富な水が多種多様な水の文化を育んできた。京都新聞社編・発行『京都いのちの水』（1983年）、平野圭祐著『京都水ものがたり』（淡交社、2003年）、鈴木康久・大滝裕一・平野圭祐編著『もつと知りたい!水の都京都』（人文書院、2003年）には、納涼床、友禅染、生麩、湯葉、豆腐、京野菜、茶の湯が取り上げられ、さらには水の神を祀る貴船神社、空海にまつわる雨乞い伝承、そして京の街づくり、今出川や堀川の人工河川が果たしてきた役割の変遷についても論じられている。

「川はそれによって生きるわれわれ人間にとっていのおちである。運命である。文化である」と書き始める岡部伊都子・文、木村恵一・写真『京の川』（講談社、1976年）は鴨川、高野川、大堰川、清滝川、山科川等を秘やかに訪ね歩いた名随筆である。

森谷尅久、山田光二著『京の川』（角川書店、1980年）は、京文化の源である鴨川、王朝詩文の舞台桂川、桜の仁和寺、芸能の里御室川、高僧たちの精神を伝える清滝川、京都復興の礎である疏水を歴史的に捉えている。

吉井勇は「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水ながる」と詠んでいるが、河野仁昭著『京の川』（白川書院、2000年）では、水上勉『京都暮色』（桂川）、川端康成『古都』（清滝川）、夏目漱石『虞美人草』（高野川）等の小説を引用しながら、京の川は文学を生み出すと評している。

琵琶湖疏水を建設した土木工学者・田辺朔郎の



ミツカン水の文化交流フォーラム2003 開催のお知らせ

なぜいま 里川なのか コンパクトシティを考える

身近な自然を表す言葉に「里山」という言葉があります。「暮らしの中で使いながら大事に守られた共有の山」というのが「里山」に込められた意味とあってよいでしょう。

では、山を川に置き換えて「里川」と言ったらどうでしょうか？農地、郊外地、都市、それぞれの場所で、みんなで守る共有の「里川」があってもよいのではないのでしょうか？

里川を考えてみる。それは、都市や地域の水

と居住者がどのようにつきあうかを考えることであり、コンパクトシティと呼ばれる次世代の都市像に「水の循環」という視点を付け加えることにつながるのではないのでしょうか？

当センターではこのような考え方のもと、本年度のフォーラムを開催いたします。水に関わる研究者や政策関係者、環境や文化を通じた地域づくり等に関わる方など、幅広い方々におこしいただきたく、是非ともご参加を御願ひ申し上げます。

日時：10月20日（月）13時～18時 18時より交流会を開催

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー26階 スカイホール

東京都千代田区富士見2-17-1 JR市ヶ谷駅・飯田橋駅より徒歩約10分

プログラム(予定)

<p>特別講演</p>	<p>「水に対する感性の歴史」 アラン・コルバン ソルボンヌ<パリ第1>大学 同時通訳がつきます。 コメンテーター 高橋 裕 国際連合大学上席学術顧問・東京大学名誉教授</p>
<p>テーマセッション</p>	<p>「なぜ里川とコンパクトシティか？」 陣内秀信 法政大学教授 「セーヌ川も里川だった」 嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役 「バーチャルウォーターが結ぶ里川と世界の水問題」 沖 大幹 東京大学助教授 「都市の水辺遊びからつくる里川」 鳥越皓之 筑波大学教授</p>
<p>パネルディスカッション</p>	<p>「里川の文化モデルとコンパクト社会」 セッション発表者によるディスカッション / 参加者との質疑応答</p>
<p>交流会</p>	<p>参加者・発表者との情報交換</p>

詳しいお問い合わせは当センター事務局まで御願ひ申し上げます。

水の文化15号予告

特集「里川の構想」(仮)

「里」は人が住んでいる自然の多い土地の意味。
 人里、里山、里居、浦里、里犬・・・
 里に住む人が多くなれば
 里人と川とのつきあいかたも変わりそうです。
 里川はわたしたちが抱く居住や都市のイメージに
 何を与えてくれるのでしょうか。



「第9回水にかかわる生活意識調査」発表

1995年より毎年実施している「水にかかわる生活意識調査」も今年で9回目となります。東京、名古屋、大阪の600名を対象に行っているアンケート調査の2003年度最新版を、当センターホームページにアップロードいたしました。社会の水意識を読む基本データとしてご活用ください。

『水の文化』に関する情報をお寄せ下さい

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介しますまいります。

ユニークな水の文化楽習活動を行っている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行っている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はモノクロで皆様に配布しておりますが、写真をはっきり見たい!というご要望にお応えし、11号からはホームページにてカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

ホームページアドレス <http://www.mizu.gr.jp/>

編集後記

この5月より「水の文化センター」の担当になりました。その初っ端が、この「14号」の取材。「京都の謎」「京都の水」に迫る今回の企画は、日本史の原点を探求するテーマでもあり大変興味深く取材することが出来ました。また、これに関わり合う人たちが、とても活き活きとしていてパワフル。これは、研究者、NPO活動家など主体的に取組んでいる姿勢がそうさせるのだと強く感じました。私も、せめて意識のレベルだけでも同等に向き合っていきたいと思えます。(吉)

1200年という京都の歴史は魅力的だが、一見平凡そうな京の暮らしを垣間見ると、普段の生活を大事にしている人の気持ちに心が響き、もっと知りたい、また来てみたいと感じてしまふ。京都の魅力は生活文化にあり、ということか。(日)

最近「京都」をテーマにしたムックや、雑誌の特集、そしてテレビ番組などが目につきます。それぞれが色々な角度から京都を斬っています。さて、今回の水の文化センターの京都特集はいかがでしたでしょうか?ご意見お待ちしております。(ゆ)

弱弱問答という落語がある。旅僧がしかけた禅問答を、住職に化けた弱弱屋主人が受け答え、双方勝手にわかった気になっている内に、旅僧が「あなたのような高僧にはかかないません。参りました」と勝手にしやっぽを脱ぐ話。世界水フォーラムは、異なる文化を背負う人同士が「わかる」ことの意味を考えさせてくれた。(中)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第14号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2003年(平成15年)8月

企画協力 嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役
 古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
 陣内秀信 法政大学教授

編集 吉田 稔 小林 信 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター
 〒475-8585 愛知県半田市の中村町2-6
 株式会社ミツカングループ本社 広報室内
 Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 東京事務局
 〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
 Tel. 03(5762)0244 Fax. 03(5762)0246



ミツカン水の文化センター



表紙上：京都清水寺の手水所。写真にはないが、鉢の下にはフクロウが彫り込まれている。

表紙下：清水寺の首羽の滝の水にはどんな力があるのだろうか。いつも口している水と何が違うのだろうか。

裏表紙上：多目的用水として建設された琵琶湖疏水を象徴する、小型舟を運ぶインクライン。

その役目は1928年をピークに陸上交通の発達に取って替わられるが、1948年（昭和23）まで続いた。

裏表紙下：京都駅の空中遊歩道から北を臨む。

地上では意識されずに目の端に入る町家に挟まれた山緑ではあるが、高所に登るとこの地が盆地であることを再認識させられる。